
東方幻想界裏伝

ティ・ラ・アイメリッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想界裏伝

【Nコード】

N7302N

【作者名】

ティ・ラ・アイメリッタ

【あらすじ】

世界は進む、この一瞬を無駄にすまいと進んでいく。

このお話は僕様がそんな時代に忘れ去られてしまったことから始まるお話だ。

始まりはいつも唐突に（前書き）

今までは画面の向こうでニヤニヤしながら見ていた私が、遂に魔が差し手を出してしまいました。

初めて書き物をする上に機会音痴な私が手を出したのは、4月になって初めて知った東方Project！

持つてる知識は他者様方の作品によるものが9割を占めています。そしてさらに、先ほども申しましたように私は機会音痴なので情報をうまく集めていくことができません。そう2chネタがワカラナイ。そしてジヨジヨネタもワカラナイ。知りうるネタは友達たちが話すのを会話に参加できずに指をくわえて見ていた時に聞いたものばかり。間違えて覚えていたりするのもあるでしょう。そんな私が頑張って書いていこうと決意致しました。

こんな私が書く100%自己満足のための稚拙なお話ですがよろしく願いました。

（かなりのビビリのためどのような感想であつても頂ければ幸いです。）

始まりはいつも唐突に

ここはどことも知れぬ場所

そんなところをふわふわと足取り軽く歩く者がいた

「これ以上はさすがの僕様でも耐えられぬ……………」

どこから見ても怪我一つ無ければ、病気を患っているようにも見えない

だけれども声はそんな彼の様子を裏切るかのような弱弱しい声だった

そう、彼の体がいくら丈夫でも心までそうはいかない

いくら彼の体が強くても、いくら彼の心が強くても限度がある

孤独には勝てない

ましてや大多数でいる楽しさを知っているならなおさらである

いくら嘆いてもあの日々は過去なのだ

過ぎ去ってしまった、終わってしまったことなのだ

300年も前に村を旅立ち、250年前に出会った人々達も時間の流れには敵わず、亡くなってしまった

それがすでに200年も前のこと

その後は気の向くままに旅を続け、興味の向くままに行動してきた
遺跡に入ってはお宝を頂戴し、商船に密航しては商品を勝手に頂き、
他にも色々やらかした

まさかその付けをここで支払うことになるとは神ならぬ身には解る
まい

後悔、先にたたずとはまさにこのこと

さて、彼の現状を確認しようか

【彼は今、道に迷っている】

もう一度確認しようか？

そう、【道に迷っている】のだ

道に迷ったごときでここまで滅入っているのだから驚嘆である

まあしかしである、彼の弁明をさせてもらえるのならば昔のことを
思い出してほしい

たった一人で見知らぬ場所にいた時のことを

いわゆる迷子になった時の事である

心細くなって泣いたりはしなかっただろうか？

どうしてこんな所に一人でいるのか怖くなりはしなかったか？

まあ、一部の者を除けば解っていただけだと思うこの恐怖

今の彼の気持ちはまさにそれである

少なくとも300年は生きている存在がそんなことで…

と思いかもしれないが一人道に迷うというのは幾つになっても、何
度目でも怖いものである

彼がたとえ誤魔化せなくても空元気を出そうとするのも無理からぬ
こと

おや、そんないつまでたってもこの状況を抜けることができない彼
にも遂に光が差すようだ

「経緯を確認しようかの

全く、何故こうなってしまったのやら

まあこの森、入る前から嫌な予感はずっとばかしあったのじゃけれど

しかし、このようなところに限って超レアなお宝があったりするからの

見つけたら探索するのは僕様からして当然のことじゃ

もはや真理といっても言いだろうの

そのうえ洞窟を見つけたのじゃからのう

テンションも上がるというものじゃ

そして、当然の如く入るわな

そうすると、かつこいい指輪見つけたのじゃ

まだまだ奥があるようだったし当然進んだのじゃが…

したらば……はあ

本当に何故このようになったのじゃろうか…

急に訳の分からぬ、さっきまでいた所とは全く雰囲気の違い森に出て来てもらったのじゃ…

洞窟を出た覚えが無いにもかかわらずじゃぞ

色々と歩き回り、探ってはみたのじゃが、周りには洞窟も何も無

いみたいじゃし

この森からは出られぬしのお…

つまり、これは何者かの結界に囚われたのじゃろつなあ

いつものように能力まで使い、しっかりパーフェクトな防御だつ
たはずなのにのお

いつ結界なんて越えたのじゃろつ「ちょっといいかしら?」「ん?
何用かの?

僕様をこのような結界に捉えたものかの?」

「あなたいったい何者かしら?」

- - - T O B E C O N

t i n n u e d

始まりはいつも唐突に（後書き）

初投稿でした。

何かおかしな事があればできるだけ早くに報告していただけると幸いです。

プロフィール(前書き)

2010年11月29日追記
2010年10月22日更新
2010年10月12日更新
2010年10月8日更新
2010年10月7日追記
2010年10月6日更新
2010年10月4日更新
2010年10月3日投稿

プロフィール

名前：ルーウェイン・イーリアス・シ・スーヤ・ム・ジカ・レアン
ナーナ

真名：ルーウェイン・レアンナーナ

略称：ルー

性別：男

年齢：5000歳ぐらい

身長：低（150cm程）

性格：寂しがりや・陽気

容姿：赤い髪・黄色の目・細身

補足：頭の回転はいい、ただしおばか・好奇心旺盛

能力：【空間を操る程度の能力】 【継承技能を扱う程度の能力】
能力の使用例：自身を害から勝手に守るオートガード

主な行動範囲：

幻想郷入りまでの経緯

5000年程前《獣々妖獣》

ただのライオンとして誕生。

10年程して、自分が異能をいつの間にか使用していたことに気づく。

大きな群れのボスになる。

周りのライオンたちは寿命で死去。死を恐れる。

20年程経過、寿命が尽きるどころか、どんどん力を増す。自身の異常に気づき、ついに妖獣化。

10年程経ち、周りのライオンが彼に根源的な恐怖を抱き、少しずつ彼から離れていく。

終に独りになる。

5000年程前〜3000年程前《妖獣・能力開発（いわゆる修行）》

3000年程前《妖獣〜神獣》

修行中に腹が減ったときに大きめの獣を狩る。たまたま人間を襲っていた獣を狩ること数回。

人間が彼の姿を見ても怯えなくなる。むしろ寄って来る。

人間に守神・戦神として信仰される。

3000年程前〜中世（15世紀）《神獣》

5000年程前〜3000年程前《神獣〜妖獣》

白人を見かけるようになる。

彼らの持つ道具に興味を持つ。

道具を奪っている、不審に思われ周辺調査される。

秘境へ引越す。

境界を越えしまった商人が現れる。

商人の持つ品物に興味津々。

商品とその使い方を教えてもらうのと引き換えに、秘境で手に入るものを提供し、開放。

以降も商人の系譜のものが現れ、取引をする。

群れの者たちが、外の世界に興味を持つ。

商人と共に外の世界へ数人が旅立っていく。彼への信仰心が少しずつ減っていく。

自分はもう必要ないのだと気づき、彼自身も外に興味を持っていたので旅に出る。

3000年程前〜2000年程前《妖獣》

旅立ち、あらゆる国を巡る。

魔法使いに出くわす。

魔法を教わるが適正がまるで無いことを知る。

魔法使い寿命により死去。魔法使いではあつたが人間だつたため。

2000年程前〜今《妖獣》

放浪の旅。

こうして今に至る。

スペルカード

体術系：疾風「地裂斬」・咆哮「波動撃」・焦点「ファイナルヘヴン」・砕落「咬撃氷狼破」・無限「冥界恐叫打」・不幸「星天爆撃打」・鬼神「乱命割殺打」・天願「聖光爆裂破」・死兆「北斗骨砕打」

魔法系：

攻：下）火罪「ファイア」・裂光「サンダー」・虚空「ブリザド」・呪縛「グラビデ」・激震「クエイク」

中）煉獄「フレア」・天空「ホーリー」・冷刻「フリーズ」・

天門「トルネド」

上）命塔「アルテマ」・混沌「メルトン」

精霊：星火「テラフレア」・神突「グングニル」・清水「タイダル

水の牙

竜の息吹

破壊の閃光

雷牙

ウェイブ」

能力系：改変「空の檻」・聖域「プライド」・抹消「空間断裂」

EX：通告「アウトオブエデン楽園世界にさよならを」

ここからは、解説を。

まず最初に彼の名前ですが、ここにすでにFF関連のものを使用しました。FFCCOTよりユーク族・セルキー族のデフォルト名を性別に関わらず良さげなものを使用しました。ちなみに作者名もここから…

次に容姿を。頭部は魔界戦記ディスガイアの魔物使いを。頭部以下、服装などはFF?のルーンネスのすつぴんをイメージしています。もう少ししたらジョブの服装に…FF?の赤魔導師の姿に（帽子は無し）

（尻尾は普通にライオンのものが一本です。）

彼が取り出した剣についても少し。あれはFF?のバスターソードを思っただけがいいです。

後はスペルカードについてですかね。体術系・魔法系はFF系のものを使いますので、自分から解説する気はあまり無いです。ぶっちゃけめんどくさ…皆さん自身の目で（ゲームをするなり、動画を見るなりして）確かめてもらったほうが分かりやすいです。ただ、威力や効果を少し変えている場合があるのでそこら辺はしっかりと

説明します。質問もあれば答えますし。

威力変えの例：ファイア（東方幻想伝） || ファイジャ（FFT）

では、オリジナルスペルの解説を。

改変「空の檻」

耐久スペル。空間裂きによる攻撃が四方八方から来る。追尾型の弾幕で避け続けるのは難しい。

聖域「プライド」

彼の周りに結界を張り内部から、相手に向かっていく通常弾幕を打つ。

抹消「空間断裂」

空間を切り裂く技。見た目は彼の振る剣から五本の斬撃的なものが飛んでいく。威力は高く、マスタースパークが五本飛んで来ると思ってもいい。ただスピードはマスタースパークに比べあまり速くないので普通に避けれる。ちなみに、空間は彼有能力で裂いているのでまっすぐ攻撃が来る訳ではないのが少々厄介。

通告「アウトオブエデン樂園世界にさよならを」

相手の周りの空間を裂き、そこから妖力の塊を放つ。

咲夜的能力解釈

単体で最広半径50mの時間を停止

補助ありで半径100mに

半径20mの時間を停止！とかも勿論あり

ちなみに分かりやすい？例で言うならば

誰かが倒れる 咲夜の能力発動 周囲で救助の準備 能力解除 即
行で治療

これでもし心臓停止して、救急車が来るまでの間に3分以上かかっても患者に負担がかからない！

幻想郷には時計が普及していないため止められた方は気づけない
紅魔館改築は咲夜が改築したのをパチュリーが魔法で固定したため
咲夜がいなくなっても大丈夫という安心設計

空間固定がある程度の実力を持つものには通じないのに、咲夜の能力はレミリアのような上級妖怪に通じるわけ

外界干渉系の能力で相手に干渉するには相手との力量差が関係してきます。生物の周りには自己領域があり、その領域を破り干渉するのです。強ければ強いほどその領域は広く、堅くなり干渉しにくくなってきました。

彼の空間固定は相手の領域を破り、圧迫するものなので領域を破れなければ効果が全くありません。

咲夜の能力による時間停止は、上記のような領域干渉によるものではなく、簡単に言えば写真のようなものです。写真は、世界の一部をその瞬間切り抜いたもので、半永久的にその瞬間を残すことができます。ただ、写真を見ている人がその光景に参与することは出来ません。なので咲夜は、時間停止能力行使中は生物に影響を与えることが出来ないのです。

とりあえず今はこんなもので。

プロフィール（後書き）

プロフィールだけでなく、作品についての質問があればそれに対する返答もここでしようかと思えます。

たまに覗いてみてください。更新時は前書きに更新日を掲載します。

一 自己紹介は大切です

「あなたいつたい何者かしら？」

ドレスを身に纏った美女が彼に質問してきた

彼女の問いを受け彼は…

「む？質問の意図が分からぬことには答えようが無いのじゃが…

主に僕様からの質問に答える気は無いようじゃしろう

まあいいわい

それよりもじゃ…！

さすがの僕様もずっと一人で心細かったのじゃ！寂しかったのじやあゝ！

まったくお主ってばいいところに来たの！褒めてつかわずぞ！

いやそれよりもちつとばかり人肌を堪能させるのじゃ！

今まで寂しかったのじゃ…！

ガシツ！と突然出てきた女性の腰に、質問に答えること無く抱きついてまくし立てる

「ちよつと、やめなさい！放して、放しなさい、放せって言ってるでしょ！！！」

ガン！！！！

おおつと ガン！！！！ と彼女の美しい足による華麗なる蹴りが突然抱きついてきた不埒者の股間に綺麗な弧を描いてクリーンヒット！

まさにひきゆうしょにあたった こうかはばつぐんだ ヲな状態である。

「ハ美女×（美しい×足）×（華麗なる×蹴り）〱×ハ男×（綺麗な弧×股間）×急所〱」

女性女性タイプ一致、弱点攻撃金的、急所分かるよね、道具形容詞（？）補正 と想像したくねえな

一撃必殺オラオラじゃねえか…

ま、まあ、女性が男性に急に抱きしめられたのである

しかもだ！人肌を堪能させるときた！

当然の酬いである（むしろもつとやれ！！）

セクハラした野郎の末路としてこれほどふさわしいものは無いだろう

絶世の美女に抱きつく

なんて嫉ましいことか

「全く、急に抱きついてくるなんてとんだ非常識ね

追撃をかけてあげようかしら」

「い、痛いのじゃ…」

「あら、あまり効いてないようね

とっさのことで加減ができなかったから、中級の妖怪なら今の体の半分は持っていかれたほどの威力はあったはずなのに…」

「わ、悪かったのじゃ。反省はしとる

じゃから僕様のことをそんな蔑んだ目で見るのは止めてくりゃれ」

彼の懇願を受け、彼女は気を持ち直し、再び彼に問いかけた

もちろん何時でも蹴りを放てる体勢だ

もしも彼がまた何やらしようとしたらば次こそはクラッシュユさせてくれるという意気込みが感じられる

ような気がする…（（∴。）ブルブル

「はあ、もういいわ。」

それで、さっきの質問のことなんだけど？早く答えて頂戴。」

「だから質問の意味が分からぬのじゃが

いくら天才的頭脳をもつ僕様であろうとそのような曖昧な質問に
は答えられんのじゃ

いや、むしろ天才的頭脳を持つ僕様じゃからこそ、適当に答える
のはいやなのじゃ

だからそこんともちつと詳しくプリクズ？」

「わがままねえ

しかも自分のことを天才的頭脳の持ち主なんて…

じゃあ、とりあえず三つ質問するからそれに答えて頂戴」

「まあ、急に抱きついてしまったこともあるし

詫びも兼ねて主の質問に出来る限り答えてやるつぞ」

「何でそんなに上からものを言うのかしら。いらっと来るわね

まったくもう、じゃあ質問するわよ

壹 あなたの名前は？

貳 あなたはどこから来たのかしら？

参 あなたの能力はいつたい何？

さあ答えてもらおうよしっかりとね
「

彼女からの睥睨を受け、少しビビりつつも返す彼（いい気味だ）

「そんなに脅すな。僕様ちっとビビってしもうたわ

んっんー

よし、喉の調子もい良いみたいじゃな

では、僕様の名をしっかりと主の耳をかつぽじって拝聴するが良
いのじゃ

僕様の名は《ム・ジカ・ルウエイン》であるのじゃ

どうじゃ？そこはかたなく素敵な雰囲気とする名前じゃろうって

神々しい名前じゃろう。フフン

うむ。みなまでいような分かっておるわ

僕様に似合うこれ以上素敵な名前は無かるうて」

胸を張って名乗るその姿には、自分の名にこれ以上無いほどの誇りを抱いている

ということが良く分かる

が、しかし、だ

確かに名は存在を定義付けるためにはこれ以上無いほどに大事なものであるのは事実だ

彼は怒るかもしれないが

今回、呼び名を決めるために訊ねた彼女にしてみればそれはただの名である

彼女は自身の力に多大な信頼を寄せていて、彼など畏るるに足らぬモノであると認識しているのだ

たとえ彼が怒ろうがしったことではない様に見える

彼の前に現れたのも侵入者を見に来ただけのこと

嗚呼、悲しきかな自身と他人との温度差に気づくことなく彼は質問の続きを答える

「僕はただ散策していただけじゃ

そしたらば怪しい雰囲気の森を見つけての、中を歩き回っていると、次に洞窟を見つけたのじゃよ

そして探検していたら急にこの森に出たというなんともびっくりな話じゃのう

それでじゃの、最後の質問なのじゃが……

このようなことはのう、いくらなんでもそう簡単に答えることは出来ぬのじゃ

「そう。ならあなたの能力、使わせてあげるだけよ」

そういうと彼女はの周りで奇怪な現象が起こった

なんと彼女の周囲の空間が裂けるではないか

中は気味悪い空間で目や手がそこらじゅうについている

あわや戦闘開始！！というところで彼は焦って声をかける。

「ま、待つのがじゃ、早とちりはよくないのじゃ！

主の名すらも知らぬのに僕様だけ一方的に情報を教えるのは面白

くないではないか！

まあ、侘びを兼ねて出来る限りは答えるとは言ったがの

それでも出来る限りと言ったように限度はあるのじゃ

だから主の名を教えてくりやれ」

それを聞くと彼女も拍子抜けしたかのように殺気を向けるのを止め、どこから取り出した扇子を振り、周囲の気味悪い空間見えなくなると彼にしゃべりかけた。

「あら、ごめんなさい

さっきから上から目線でしゃべられたうえに、質問に答えてくれなかったものですからちよっといらつときてしまったわ。

では、名乗りましょう

私の名前は《八雲 紫》この幻想郷の管理者よ」

彼女の名を聞き、彼は満足そうに頷き質問に答えた

「そうか、八雲紫じゃな

では、八雲のに僕様の能力を教えてやるのじゃ

僕様の能力！それは【空間を操る程度の能力】じゃー！

どうじゃー！すごかろうー！

チートじゃろうー！！

能力の及ぶ有効範囲ならば僕様はどこにだってテレポート出来るのじゃぞー！

ヾ(！j・ワ・ノj”　ワハハ

「あら、なかなかの能力ね

私と似たようなことまで出来るなんて…

でも、それならどうして道に迷ったときに使わなかったのかしら

もしかしてその有効範囲がとても狭いのかしら

そんなことで堂々と自慢できるなんて笑えるわ」(。m。*(プッ

馬鹿にしたかのような彼女の笑い声がする

それを彼は顔を赤くして聞き、弁明を始めた

「ち、違つのじゃー！僕様の能力の有効範囲は決して狭くなど無いのじゃー！

普段から使うと新たな発見が見つからぬかもしれんから普段は簡易封印してゐるだけなのじゃ！！

まあ簡易じゃからの、能力の残滓が体から漏れ出すのじゃけれどその分はとつさの時や、有害な結界などから身を守ることに使っているのじゃよ」

彼女、八雲紫は彼に少し意識を集中させ、彼の言の真偽を調べた

「へえ〜。まあそのことに関しては嘘ではないようね

それで、どうしてかしら

彼女の追撃となる問いに対して消えてしまいそうな小さな声で彼は言った

「た、ただ単に忘れていただけなのじゃ……」

本当に恥ずかしいことこの上ない理由である

彼女はそれを聴くとまた笑い出した

当然のことである

しかもつぼにはまったくらしい

「い、いくら、ち、力を封印していたからって、自分の能力のことを忘れるなんて

なんてお馬鹿な。もはや？ね！」

「笑いすぎじゃ！それに？っていうでないわ！

？の意味は良く分かんが馬鹿にされているのは分かるのじゃぞ
！！

全く、も、もういいじゃろってこの話は…

それでじゃ、次はお主の能力を教えてくださいやれ」

彼からの要求を受け、八雲紫は笑いを堪え始めた

少しばかりの時間をかけ、八雲紫の腹筋に多少のダメージを与えた
言を乗り越え、彼の要求に答えはじめた

「そ、そうね。ごめんなさい。笑いすぎたわ

ああ、それと私のことは 紫 と呼んでくれていいわよ

もしもあなたが中級妖怪程度ならば紫様と呼ばせてあげたいのだ
けれど

一応上級のようなだしね」

「紫かの。分かったのじゃ。そう呼ばせてもらうとするかの

僕様のことは ルウエイン でいいのじゃ

そして僕様が強いのは当然のことじゃてー!

「ルウエインね。分かったわ

さて、私の能力だったわね

私の能力は、【境界を操る程度の能力】よ

「おおお。なにやらカッコよそそような能力じゃのう

「あら、ありがとう

「そういえば、紫は名を覚えてくれたときに 『この幻想郷の管理者』
』と言っていたの？」

「どういふことが教えてくりゃね？」

「そうね。ああ、そういえばまだあなたに伝えてないことがあった
わ」

八雲紫は彼、ム・ジカ・ルウェイインに傾国のと形容詞がつくほどの
微笑みを向け言い放った

「ようこそ。この美しく残酷な楽園世界へ。

私、八雲紫は、外界から忘れられた者ム・ジカ・ルウェイインを心
より歓迎するわ。」

O n t i n u e d . . .

- - - T O B E C

一 自己紹介は大切です（後書き）

ドキドキしながら書いてみました。
いやぁ、難しいですね。

早速キャラ崩壊しそうになりました。

もしよければ感想ください。

今後の成長の足しにしたいです。

5/17改定

主人公の名をルーウェイン・イーリアス・シ・スーヤ・ム・ジ
カ・レアンナーナ

ム・ジカ・ルウェインに変更

？ 彼の軌跡

彼らは歩きながら情報交換をしていた

「なるほどの。紫はこの幻想郷の守護者みたいなものなのじゃな？」

「ええ。そう思ってくれて構わないわ

ここでは力のあるものが起こす怪異のことを異変と呼ぶの

別に異変を起こすこと自体は構わないわ

長い時を生きているのだからちよつとした刺激は欲しいものね

ただ、私はそれで幻想郷に大きな被害を起きないようにするだけ
「よ

と、ここまでの説明を聞き、頭の中を整理している彼を見て今まで疑問に思っていたことを八雲紫は問いかけることにした

「ねえ、あなたいったい何の妖あやかしなのかしら？

見たところ猫みたいなのだけれど、尻尾が違っし

名前からしてもこの幻想郷の存在する国の妖では無い様だし」

「ん？僕様の素の姿のことか？

僕様はの、人間どもにアフリカと呼ばれるところで生まれたライオンの妖獣じゃぞ」

「そう。もう一ついいかしら

あなたいったい今どれほど生きているのかしら？

2000年は生きているように思えるのだけれど

「それがじゃのう、よく分からんのじゃよ

感覚でいいのならば、5000年は生きていると思つのがの

「そう。まあそこまで細かい年齢までは気にしなくて良いわよ

彼女の質問にしっかりと答えることが出来なかったからだろうか、出会ってから何気にはぼずっと元気に振り回されていた彼の尻尾が目に見えてしょぼくってしまった

彼の先ほどまで無邪気に振り回されていた尻尾に少しばかりの微笑

まじさ感じていた彼女はその様子に焦り、フォローをし、彼の頭を優しく撫でてやった（妬ましい）

すると彼も喜び元気を取り戻したようだ（現金な奴め）

そうそう、ちなみに彼の見た目なのだが、150cm程の身長と小柄である

そんな子供にしか見えないような彼が、いくら偉そうにしゃべってみてもお馬鹿なミス（能力のことを忘れる）を一度見てしまえばまあ良いかと思えてくるので不思議である

それに見た目と口調が一致しないというのも要因として大きいだろう

ロリババアならぬシヨタジジイである

「うむ。小さなことを気にしていても仕方なからうて

よしそのことは忘れるのじゃ

それでじゃ。年齢を答えられなかった代わりに、僕様の昔語りをしてやるうと思つ

先ほども言ったようにの、僕様はアフリカで生まれたのじゃよ

最初はただのライオンじゃったよ

そう、周りの兄弟たちとも変わりないただの獣じゃった

僕様がいつ能力に目覚めたのかは分からの

ある日のことじゃった

僕様はのう、自分が能力を使い狩をしとることに気付いたのじゃよ
そうやっての、能力を用いて狩をしていたからじゃろうかね

いつの間にかじゃ、僕様はの、大きな群れを持つほどの地位を手
に入れていたのじゃ

まあ、いくら能力を持っていてもじゃ、当然のことながら僕様の
命は一つしか無いのじゃよ

僕様を慕い集まり、群れを作っていた仲間たちがのう、寿命で死
んでいくのを見ての、僕様も恐怖したものじゃよ

しかしじゃ。周りの仲間たちがの、寿命が尽き次々と死んでいっ
たのに対してじゃ

僕様だけは何故か時が経つほどにの、力を増していくのが分かっ
たのじゃよ

最初は勘違いかと疑っていたのじゃけれどな、確かに力が増して
いくのを実感できたのじゃ

多分そう実感したことが最後の要因だったのじゃろうて

この時にじゃ、僕は妖獣として覚醒したのじゃよ

思えば能力に気付いた頃からのう

僕様の体の成長はの、明らかに他の仲間たちに比べて遅れていったのじゃ

そうしてじゃ。覚醒してからは完全に止まったのじゃよ

まあ、そうして妖獣と化した僕は漠然とこれで死ぬことは無いのじゃと喜んだのじゃ

仲間たちもものう、最初は群れのリーダーの力が衰えるどころかじゃ、どんどん強くなっていくということに喜んでくれのじゃ

しかしじゃ

あやつらはの、自覚したことで急激に力を増していく僕様に対してじゃ、根源的な恐怖を感じてしまったのじゃろうよ

どんどん僕様の周りから離れて行ってしまったのじゃ

そうしての、長い時間を僕は独りで過ごしてきたのじゃ

まあ、この間にの、僕は能力の狩時以外での使い方を編み出していったのじゃよ

ああ、そうじゃ。僕はの、別に人間を喰う必要が無い妖らしくてのう

まあ、そのことを知ったのはじゃ、旅に出てから、他の妖に出会ってからじゃったがの

僕はのう、とりあえず動物の肉を喰えたらそれで良いらしいのじゃ

ええっと、それでじゃ

編み出した能力によつての、大きな獣を襲っていた頃のことじゃつたな

人間どもがじゃぞ

僕様のことをじゃ、まもりがみ守神・いくさがみ戦神として信仰し始めたのじゃ

僕様と人間どもの接点といえじゃ

人間どもが大きな獣などに襲われたときとかにじゃの、僕様が獣のほつが人間よりも喰い応えがありそうじゃからという理由でそいつを襲ったことぐらいじゃ

その姿を見て逃げるなりなんなりするじゃろうと思っとなった人間どもがのう、まさか僕様のことを信仰し始めたのじゃよ

仲間たちにも恐れられたこの僕様をじゃぞ

あの時はとても嬉しくてのう

僕様の周りに集ってくるこいつらとのう、もう一度だけ群れを作ろうかと思っただのじゃ

そうしてじゃ、信仰を受けることでの、僕様はさらに強くなっていったのじゃ

ちなみにじゃがの

僕様を信仰し始めた奴らは何故か女ばかりの部族じゃっての

今ではそういう者たちのことをアマゾネスとか呼ぶらしいのう

まあ、その話はよいかの

そうしてじゃ、信仰の恩恵と思うのじゃが奴らには加護が与えられたのじゃ

身体能力が大幅に上がったの、さらに呪術とかいうものを習得する者まで現れたのじゃ

そうして何年もの時が過ぎてのう

僕様たちの群れの近くをじゃ、白い肌の人間どもがうるちよろとし始めるようになったのじゃ

僕様は普段から進入禁止結界を張っていたので、そいつらと出会ふことは無かったのじゃがな

そやつらの持つ物にちつとばかり興味を惹かれてのう

僕様たちはたまにの、そやつらのうち一人で行動しとるような奴を狙って襲い掛かり、荷物を奪ったりしていたのじゃ

そこで得たものがまた面白くてのう、仲間の奴らに使い方を教えてやると凄かったのじゃ

今まではそやつ一人では倒せなかったような大物をの、簡単に倒してしまつたのじゃ

そうして仲間たちも人間どもの道具に興味を持つようになってのう

ちよくちよく襲っていたものじゃ

そういつことを何度も続けていくとの、相手も馬鹿ではないからのう

僕様たちを討伐しようとしてきよつたのじゃよ

無論、いくら奴らが武装しようともじゃ

僕様たちが負ける道理はこれっぽちも無かったのじゃがな

ただ、こやつらを倒してもこれで終わらずにの、さらに大人数になるのは予測できたからの

そのような無駄なことはせずにじゃ

僕様たちは棲みかを秘境へ移すことにしたのじゃ

そうしてまた仲間たちと暮らし、何年か過ぎた頃のことじゃった

僕様の結界を超える者が現れたのじゃ

たくさん見知らぬ道具を持った、なにやら商人とかいうのが迷い込んで来たのじゃ

そやつは最初、僕様たちに怯えていたのじゃがの

道具の使い方などを聞き出してからじゃ、半年ほど経った頃から慣れてきたらしいの

そしてそやつの持つ道具の使い方を僕様たちはほとんど習得したのでの

そやつに礼として植物等をいくつかくれてやったりしてから解放

してやることにしたのじゃよ

開放してやってからもそやつ系の商人が度々僕様たちの下に現れたのじゃ

面白そうな道具をいくつも持って来ての

そうして帰るときにはじゃ、また僕様が礼としていろいろとくれてやったのじゃ

そのようなことを何度もしていると、仲間たちが外の世界に興味を持つようになっていったのじゃよ

まあ、当然のことじゃな

わざわざ待つことも無く、新しいものを手に入れるには外の世界に出るのが最も簡単じゃ

じゃからの、僕様は商人に仲間を預けることにしたのじゃよ

そうして行くうちにじゃ、信仰心が少しずつじゃが薄れていくのが分かったのじゃ

仲間たちとしては、今までどつりに僕様を信仰しているつもりじゃったのじゃろつて

しかしじゃ、あらゆるものに興味を抱くうちに、知らず知らず

のうちにじゃ、彼女らの僕様への信仰心が消えていったのじゃ

まあ仕方の無いことじゃったよ

高かった身体能力もの、武器や道具を使うようになってからはそれほど必要としなくなったのじゃろうか

ドンドン落ちていったのじゃ

しかしじゃ、仲間たちはそれをあまり気にしなかったのじゃ

呪術を使えるものものう、信仰心が減っていくと共にじゃ、少なくなっていくともうたのじゃ

そうしての、群れはもはや必要なくなっていくともうたのう

仲間たちにとって僕様はの、絶対に必要な存在ではなくなっていくともうたのじゃ

それでじゃ。この機会にの、僕様は放浪の旅に出ることに決めたのじゃよ

実は僕様も外の世界に興味を持ってしまったのう

まあ、そうして旅をして来ての

友人ともいえた者たちと出会い、別れ、また世界を一人放浪し、今ここに至るといふ訳じゃよ」

「そう。なかなか面白い波乱万丈なお話だったわ」

相槌を打ちながらずっと聴き役に徹していた彼女はそう言つと前方を指差した

かれこれ数時間も歩きながら話していた彼らの前には、一軒の家があつた

「ここはマヨヒガと呼ばれる場所よ

あの家は私の家ね。あなたにはまだ説明しきれない幻想郷のルールがあるの

それをあそこで教えるわ

他にもこの幻想郷の土地をあなたに教えてあげましょう」

-. - . T o B e C o n t i n u e d . - . -

? 彼の軌跡(後書き)

さて、主人公の過去話をさっそく書きました。

18時頃に一度書き上げたのですが、題名を入れるのを忘れエラーになり、保存も忘れていたので悲惨なことになりました。今後は気をつけようと思います。

やっぱり難しいね、書くのは。

5月18日 改定

3 どこへ行くのか（前書き）

長らく更新をしないでまことに申し訳ないです。

言い訳になりますが、インターネットに接続できなかつたのです。

頑張れば直せるレベルの問題だったので、つついポケモンに…

全面的に自業自得ですね。

こんな私ですが、頑張つて更新を続けて行きたいと思うので今後ともよろしく願います。

3 どこへ行くのよ

彼の過去話を聞くうちにたどり着いたマヨヒガ。

玄関付近には彼らの到着に気づいたのか二つの人影があった。

「お帰りなさいませ、紫様。彼が先ほどの者で？」

「紫さま、お帰りなさいませー！」

「ええ、今戻ったわ。そうよ、ちゃんと準備はできているかしら？」

「はい、もちろんです。」

彼を置いて進む話の内容が気になるのは当然の事で、彼は紫に尋ねた。

「紫、何の話をしているんだ？先ほどのっていつ僕様のことを教えたのだ？」

「ふふふ、ごめんなさいね。ついさっき言ったように、あなたに幻想郷のルールや土地を教えるための準備などの事の話をしたのよ。そして、彼女は私の式で、それを通じてあなたの事を知らせておいたのよ。」

「なるほど、そういうことか。」

彼は出迎えてくれた彼女らに向かい合い、挨拶をはじめた。

「僕様の名前はルーウェイン・レアンナーナだ。よろしくな。」

彼の名前に疑問を感じたのは紫だけではなく、式を通じてある程度
の事を聞いていた紫の式でもある。

無論、疑問は『どうしてあの長つたらしい名前がそんなにコンパクト
トになったのか?』であることは言うまでも無いだろう。

その疑問は彼が紫たちの様子に気が付いてすぐに解決させた。

「僕様の個体名はルーウェイン。そしてレアンナーナは昔の群れの
名前、つまりはファミリィネームだ。僕様の名はどちらもそこはか
となく素敵で、神々しい名ではあるが、一方は所詮は僕様が旅の途
中で気にいった名を後から付け加えただけだ。故に、ここでは真名
を名乗ったのだ。」

「それは、私を信用してくれたと思っていいいのかしら?でも、どう
して出会ったときはあちらの名を?」

「真名が大事だというのもあるし、ええっと、その、あちらのほう
が見栄えというか何というか………そう、雰囲気があるではないか
(今回名乗ったのは僕様を真名で縛れる者などいないだろうと思っ
たからだしな……)」

「そう、わかったわ。ふふ、あなたの真名ありがたく頂戴いたしま

すわ。」

と、彼の名を聞き終え、次にすることは紫の式たちの自己紹介だ。

「では次に私が名乗らせてもらいますね。私は九尾狐で名は、八雲藍。紫様の式として幻想郷管理のお手伝いをしています。よろしくお願ひしますね。ほら、次は橙だ。頑張るんだぞ。」

「はい、藍さま。橙です。藍さまの式をしている猫又です。ええつと、まだまだ未熟者ですが八雲の名を頂けるように日々しようじんしています。よろしくお願ひします。」

「えらいぞ、橙。よくできたな。」

「はい、藍さま。頑張ってかまずに言えました。」

なにやらほほえましい様子を見せている主従だ。

「ふふ、自己紹介も済んだことだし中に入って食事にしましょうか。ちよつどお昼時だしね。」

「じちそうさまです。さすが藍さま、おいしかったです。」

「それは良かった。ルーウェイン様のお口には合いましたか？」

「うん。おいしかったぞ。」馳走様だ。」

「ご馳走様。おいしかったわ、藍。」

「腕を振るった甲斐がありました。」

「ところで藍、僕様のことはルーでいいぞ。もちろん橙もだ。」

「ありがとうございます。ですが、私としてはルーウェイん様は紫様のお客様なのですいませんが…」

「わ、私もあの…」

「そうか、わかった。まあ僕様としてはどう呼ばれようがあまり気にはしないからな。いつでも気安く呼んでくれて構わないぞ。」

「ありがとうございます。」

「あ、ありがとうございます。」

「さて、食事も食べ終えたことだし、そろそろ本題のほうに入りましょうか。まず最初に幻想郷のルールについて説明するわ。」

「よろしく頼む。」

「まあ、ほとんどはこちらに来る道中で語ったから、ここで話すの
は一つだけ。スペルカードルールと呼ばれるものについてよ。幻想

郷には私達のように大きな力を持つ妖やあまり力の無い妖、人間、妖精などがいるわ。生活しているいじょう大なり小なりの争いはある。そしてその争いが力を持つものによるものだった場合、この幻想郷に大きな被害が出るかもしれない。そのようなこともあってこのルールが出来たの。まあ、出来た経緯まで話すと長くなるからそこは省いて説明するわね。

まず最初にスペルカードについての概要よ。基本的に、あらかじめ技の名前と命名しておいた名前の意味を体現した技をいくつか考えておいて、それぞれの技名を契約書形式で記した契約書を任意の枚数所持しておくの。この契約書を「スペルカード」と呼ぶわ。カードが使われることが多いがけれど、必ずしもカードである必要はないわ。

次にルールね。対決の際には、決闘開始前に決闘内での使用回数を提示して、技を使う際には「カード宣言」をするの。宣言が必要だから、不意打ちによる攻撃は出来ないわ。ちなみに宣言の際に技の名前を言う必要はないわよ。体力が尽きるかすべての技が相手に攻略された場合は負けとなるの。たとえ余力が残っていても提示した全枚数を攻略されたら、負けを認めなくてはならないわ。技の美しさにもウェイトがおかれていて、精神的な勝負という面もあるわ。

後は補足かしら。「弾幕ごっこ」と呼ばれることもあるけれど、攻撃が弾に限定されることもなければ、スペルカードの技が弾幕である必要もないわ。主に、精神的な生き物で、肉体的なダメージでは致命傷にならない妖怪のために作られた決闘ルールだから、危険だから禁止という概念は少ないけど、人間の場合は当たり所が悪ければ死ぬこともあるわね。ちなみに、相手を負かした後に追い討ちをかけて殺すことは禁止されているの。

これらのルールによって、「スポーツ感覚に近い決闘」と表現されるような闘いを気軽に行うことが可能となったわ。大規模な異変を引き起こしても、一度敗れたら素直に引き下がって禍根を残さないので、妖怪は異変を起こしやすくなり、人間も異変を解決しやすくなったわね。」

「ふむ、なるほど大体分かった。負けても致命傷にならないのはいいな。何度でも楽しめる。外では力のあるものが戦うとたいいてい一方が死ぬからな。負けても後があるというのは気が楽になる。先ほど紫が言ったように妖怪たちは精神的な生き物だからな。負けても後腐れが残らず、精神的なダメージも大きくなければ消滅するようなことは滅多に無い。」

「理解してもらえてよかったわ。ああそれと、これが契約書ね。思いついたら書くといいわ。もし出来上がったら一度実践してみましよう。」

「わかった。考えておく。」

「じゃあ少し休憩しましょうか。のどが渴いたわ。藍お茶を頂戴。」

「ただいまお持ちします。」

「私も手伝いますー。」

「ふう。さて、次は幻想郷の各地の説明をするわね。藍、地図を持ってきて頂戴。」

「こちらです、紫様。」

「ありがとう。では話を始めるわね。」

まずは最初に教えるのは博麗神社。

博麗神社は、幻想郷の東の端の端、外の世界との境界に位置する神社で、外の世界の人里からも幻想郷の人里からも離れた山奥にある。博麗神社はあくまで「境」にあつて、神社の境内は厳密に言えば幻想郷ではなく、幻想郷でもあり外の世界でもあるわ。また境界の境であるため、外の世界の物が流れ着きやすく、神社周辺は人間妖怪を問わず珍品収集家が多く集まっているわね。また、博麗神社境内ではほとんどの結界が効力を失うわ。

次は妖怪の山ね。

幻想郷で「山」と言えば通常は「妖怪の山」を指すわ。多くの古参妖怪や神々が住み、人間や他の妖怪たちとは異なつた独自の文化や社会を築いているわ。特に天狗や河童は、外の世界を模した高度な技術力を持つっているわ。幻想郷にまだ鬼が居た頃、天狗を従えた鬼神が築いた社会が基盤となつていて、妖怪には珍しく組織的な社会となつているの。仲間意識が強い反面、排他的で、山に入り込む余所者は追い返そうとするわね。

山の裏側には三途の川へと至る「中有の道」が、山の中腹には「大蝦蟇の池」があつて、また妖怪の山から流れ出した川が「霧の湖」に注ぎ込んでいるわ。

次は三途の川よ。

中有の道を進んだ先にある、彼岸と現世の境となる川ね。幻想郷ではないけど幻想郷から歩いて河岸に行くことが可能な場所で、「妖怪の山」の裏側にあるのだけど、中有の道を通らなければ川に辿りつくのは不可能よ。川の中には淡水海水の関係なく絶滅したあらゆる水棲生物が生息しているけど、水棲生物の幽霊なので釣り上げることができないわ。

次に冥界。

閻魔から転生や成仏を命じられた幽霊が駐留する場所よ。虫の霊なども居るけど鳴くことはなく、生きた植物に混じって植物の霊も植えられているわ。顕世とは結界で隔てられているのだけどね。ちなみに冥界にある白玉楼は広大な日本屋敷でね。この屋敷の主人は西行寺幽々子といって、庭師兼護衛役の魂魄妖夢や多数の幽霊が住んでいるわ。その主人と私はお友達なのよ。

次に霧の湖。

「妖怪の山」の麓にある霧に包まれた大きな湖よ。「妖怪の山」の川から水が流れ込んでいるわ。霧で視界が悪いため広大に見えるけど、歩いて半刻もかからず1周できる程度の大きさね。湖にある島には紅魔館が建っているわ。

そして紅魔館よ。

紅魔館は、幻想郷の「妖怪の山」の麓、「霧の湖」にある島の畔に建つ洋館よ。全体的に紅い色調をしていて、館の前の道も一面の紅になっているわ。時計台もあって、夜中12時にのみ鐘がなるわ。この館の主人は吸血鬼のレミリア・スカーレットよ。

ついでに大図書館ね。

紅魔館の地下にある大きな図書館よ。館に住む魔法使いの書齋になっでいて、風通しが悪く日当たりもないので、かび臭いわ。蔵書には大量の魔導書があつて、その魔法使いが書いた魔導書もあるらしいわ。魔導書以外の本もたまに混じつていて、その多くは外の世界の本らしいわね。

次に迷いの竹林よ。

竹が生い茂る幻想郷の竹林で、人間の里から見て妖怪の山の正反対に位置するわ。深い霧が立ち込め、竹の早い成長により日々変化して目印がなく、緩やかな傾斜によって方向感覚も狂つたため、妖精ですら迷うわね。

忘れていたわ。次は人間の里よ。

幻想郷の人間のほとんどは人間の里に住んでいるわ。私が保護して、人間の里の中にいれば妖怪に襲われることはほとんど無いわ。幻想郷で「里」と言えば通常は「人間の里」を指すわね。里の中には河童が作った龍神の石像があつて、眼の色によつて的中率70%程度でその日の天気分かるわ。また里の中には妖怪向けの店

も数多く有り、藍も買ひ物に訪れることがあるのよね。

次に魔法の森ね。

魔法の森は、幻想郷の「魔」が集まった森よ。幻想郷で「森」と言えば通常は「魔法の森」を指すわ。この森は常に禍々しい妖気で溢れていて、化け物茸の胞子が舞い、普通の人間は森の瘴気に長時間耐えられないわ。だから、人間だけでなく妖怪もあまり寄り付かない場所となつているの。瘴気に耐えられる人間にとっては妖怪があまり来ないため安全。また化け物茸の胞子がもたらす幻覚は、人間の魔力を高める作用があるので魔法使いを志すものが好んで住み着くわ。後、森の入り口には古道具屋「香霖堂」があるわね。

ここもまたついでに紹介しておくわね。香霖堂よ。

香霖堂は、森近霖之助が営む古道具屋よ。「人間の里」から「魔法の森」に向かうと森の入り口に建つていて、神社と里と森の間に位置しているわ。人間の里から魔法の森への道のりは幻想郷では比較的マシな部類に入るわね。霖之助が無縁塚をはじめとする場所で拾つて来た外の世界や冥界、あるいは人間用・妖怪用を問わずありとあらゆる道具を取り扱つていて、求聞史紀でもこのような店は幻想郷では唯一であるとされ、森近霖之助本人も「拾いものを売る店」と称しているわ。外の世界の品物では、パソコン、デジタルカメラ、ストーブなどが並んでいるけど、陳列されている商品はどれも値札が付けられてなくて価格交渉が必要で、店内には始めから売る気がない非売品も多いわね。ティーカップなど日用雑貨も扱っているから、店の客としてはレミリア・スカーレットや彼女のメイドなどがお得意様としてよく来店しているわ。

そして無縁塚よ。

無縁塚は、魔法の森を抜け、「再思の道」を進んだ先にある木々に囲まれた小さな行き止まりの空間にある、無縁仏のための墓地よ。結界の綻びがある結界の交点になっているため、冥界や三途の川とも繋がることがあり、また外の世界の物が落ちてくることも多いわ。妖怪桜である「紫の桜」があるのもここね。

次は地底界よ。

簡単に言うと地下の世界ね。地霊が住んでいるわ。幻想郷ではないけど幻想郷と行き来可能よ。

ついでに地域の説明もしておくわね。

旧都についてよ。

昔は地獄の一部だった場所ね。地獄の繁華街だったけど地獄のスリム化により切り捨てられたわ。地下だけど、冬には雪が降るわ。移り住んだ鬼たちが、忌み嫌われた能力を持つ妖怪を受け入れて地底都市を巨大なものへと築き上げ、鬼たちの楽園になっているわね。地獄だった頃の施設には、いまだに地獄に落とされた者たちの怨霊が残されているわ。地上の妖怪たちが地底都市を認める条件として、妖怪を地底都市に入り込ませない代わりに鬼は旧地獄の怨霊を封じる、という約束が地上の妖怪の代表としての私と地底の鬼たちの間で交わされているわ。

次は地霊殿ね。

旧地獄の中心にある灼熱地獄跡の上に建てられた館よ。地面にある天窓が輝き、下から熱風が吹き上げ、中庭に灼熱地獄跡に通じる穴があるわ。灼熱地獄跡の怨霊の管理を任されている古明地さとりが住んでいて、地獄に住む動物たちが古明地さとのペットとして怨霊の管理や別のペットの世話などをおこなっているわ。

後は灼熱地獄跡ね。

昔は灼熱地獄だった場所よ。さとのペットが怨霊の管理や火力の調整を行っているわ。

さて、次は太陽の畑よ。

妖怪の山とは反対方面の奥地にある南向き傾斜のすり鉢状の草原よ。夏になると一面に向日葵が咲き誇るわ。妖怪やプリズムリバー楽団っていうのなどが夏の夜のコンサート会場にしているわ。ちなみに、ここにはとても好戦的な風見幽香という妖怪がいることが多いわね。

そして最後にここ、私、八雲紫の屋敷がある場所よ。

幻想郷の良の端、博麗神社と同様に外の世界との境界上にあるわ。

これで主要なところは大体教えたと思うけど。どうかしら分かりますか？

「ありがとう、紫。すっかり覚えたぞ。なかなか面白そうところだなこは。」

「そついてももらえて何よりだわ。」

「さて、いろいろと教えたことであなただも幻想郷に強い興味を持つたようね。だからもう一度この言葉を送りましょう。」

『ようこそ、このすべてを受け入れる美しく、優しく、それ故に残酷な地、幻想郷へ。私はあなたの来訪を心より歓迎するわ。』

3 どこへ行くのか（後書き）

スペルカードルールや幻想郷各地の説明については `wiki` を使わせてもらいました。見にくいなどのことがあればこちらでも改善しますが、`wiki`を見たほうがよいと思われます。

はっ！！今回の話はほとんどが `wiki` によるものだし、次からは頑張るんだから期待しててよね。

4 旅立ちの空はいつも緋かった（前書き）

誰でも感想を書けるようにしました。

皆さんが読んでいて気になったことなど何でもいいので書いていただけると喜びます。

では、これからもよろしく願います。

4 旅立ちの空はいつも緋かった

幻想郷について教えてもらった彼が今すべきことは一つだろう。

「さて、いよいよスペルカードについて考えねばならんな。」

「そうね。長年生きてきた中で技の一つぐらいあるでしょうっ？それをスペルカードにすればいいのよ。」

「そうですね。最初なのでそれほど難しく考える必要はないかと思えます。」

「ふむ、それもそうだな。しかし、今後のためにも一度お前たちのを見せてくれないか？」

「そうね、構わないわ。」

「私も大丈夫です。」

さすがに屋敷内で使うわけにはいかないので彼らは庭に出た。

「では、まず橙からね。」

「わ、私ですか！？私のまだ完成してないのに…」

「今後の参考にする程度だから軽い気持ちでやってくれて構わない

ぞ。いや、むしろ完成途中の物も見てみたい。」

「わかりました。頑張ります。では、仙符「鳳凰卵」ど、どうでしたか？」

「よく頑張ったな橙。これからも立派な式になるために日々精進するよ。」

「はい、藍さま。」

「では、次は私がお見せします。幻神「飯綱権現降臨」と、このよ
うな感じで。」

「最後に私ね。紫奥義「弹幕結界」どうかしら？なかなかのものだ
と思うのだけ。」

「うん。いろいろと参考になったぞ。それに紫のものは僕様的にと
ても興味深い。」

「そう。さて、先ほど言ったように私があなただの弹幕ごっこのお相
手をしましょう。」

「よろしく頼む。とりあえず考えついたのは二つだ。」

「わかったわ。それじゃ始めましょうか。」

「いくぞ。抹消「空間断裂」」

「いくぞ。」と掛け声をかけた同時に多大な妖気を体に纏わせ。彼の攻撃宣言と共にどこからとも無く取り出した西洋風の片刃の大剣による振り下ろしが、空間を大きく切り裂き紫に猛スピードで迫る。

「ふっ。な、なかなかの威力ね。初めてのスペルカードだからと思つて少し油断したわ。」

ルーウェインの攻撃跡を見た彼女は顔を引き攣らせながらそう言った。彼の攻撃は紫のいた場所だけではなくその周りの空間も消されていた。とつさに隙間を使って回避したから良かったものを、油断しすぎたようだ。普段の彼女ならば、隙間を使わずに軽く避けられる程度の攻撃だったのに。

「それなりに威力はあつたけど当てるのは難しいと思つわ。斬撃を飛ばすのはいいけど一つだけじゃね。後その剣はどこから出したのかしら？」

「これは斬撃を飛ばした訳じゃないぞ。僕様の能力で空間を割つたのだ。剣を振つたのは攻撃のイメージのためだ。まあ、正直な話、長年にわたつて習得したこの能力の行使にイメージなど今更必要ではないが、せつかくの遊びなのだしこれくらいのモーションを入れてもいいだろうということだな。それと今回は試し打ちだったからスピード、範囲などがある程度抑えたのだぞ。本来なら五つほど割る攻撃だ。そしてこの剣だが、これは僕様の魔力で編み出したもの

だ。」

「あら、そうなの。そう、あなた魔法まで使えるのね。」

どうして能力を聞いたときに「魔法を使う程度の能力」を教えなかったー！と少し怒気を発しながら目で言ってくる紫に、彼は焦りながらも弁解した

「いや、魔法は使えん。これは旅の途中に出会った魔法使いに一時魔法を教えてもらおうと思った時のことなのだが、僕は確かに魔力を持ちそれをしっかりと操ることが出来る。ただ、適正のある魔法が一つも無いのだ。剣を編み出したのは魔法によるものではない、先ほど言ったように純粹に魔力で編み出したのだ。剣は僕様の体の延長、爪の役割をしているにすぎん。旅をしていると当然のように人間と関わりあうだろう？そして僕様も生きているし食事が必要だ。人間が見ているところで爪で狩をするのはおかしい、体術で仕留めるのも出来るがそれだと注目を集めやすい。だから剣を使うことにしたのだ。ただ、人間が使うものは僕様にとって脆すぎるからな。魔力で編み出すことにしたというわけだ。」

「そういうこと。わかったわ。納得してあげましょう。」

何とか弁解できたようだ。ほっと一息つく次はもう一つのスペルカードの試し打ちだ。

「じゃあ、次のスペルカードを使ってもらおうかしら。」

「よし、いくぞ。聖域「プライド」」

「あら、今度は先ほどの攻撃特化型とはまた違った防御型なのね。」
「群れを守るのが僕様の仕事だったからな。これはとても僕様にとって大事な思い出の一枚になるだろう。」

「そう。まあ、この二枚でも十分闘えるでしょう。さて、あなたはこれからどうするの？」

「いろいろな場所を巡ってみたいと思う。とりあえず紅魔館に行ってみるつもりだ。僕様は確かに魔法の適性が無いと言われたが、幻想入りした魔法の適性まで無いとは言い切れないからな。大図書館を見たいのだ。」

「わかったわ。気をつけていきなさいね。」

「おう、行って来る。」

「行ってらっしゃいませ、ルーウェイン様。」

「行ってらっしゃいませー。」

「ではな。また会おう。」

紅魔館へ向かう彼の後姿を見送り、八雲家へ彼女たちは入っていく。

藍は疑問に思った。どうしてこんなに紫様は彼に優しかったのかと。いくら考えても分からないので本人に直接聞いてみることにした。

「紫様、何故彼にここまで優しく？」

「あら藍、嫉妬かしら。」

ふふふ。いつものように胡散臭い笑いで聞き返してくる。

「違いますよ。ただ疑問に思っただけです。」

「私も気になりました、紫様。どうしてですか？」

「あら、橙もそう思ったの。理由は簡単よ。単に彼を気に入っただけよ。」

相変わらず胡散臭い笑みのまま答えた紫に藍は少し彼に同情した。

「(きっと苦労されるのだろうな…)」

さて、ルーウェインはいったいどうなるのか。それは誰にも分からない。

「ルーウェイン・レアンナーナ、あなたの幻想入りにより幻想郷が
どう変わるのかとても楽しみだわ。」

4 旅立ちの空はいつも緋かった（後書き）

そろそろ主人公の見た目などを公開しようと思います。

つまり、次は紅魔館ではなく彼のプロフィールということですね。

タグにFFとあるのにどこにも関連するものが無いじゃないか！！
というあなたへ

すでにFF関連のものは出ています。FFCC系列のものですが、もし分かった方がいたらニヤニヤしてください。分からないと思います。そしてすぐにはらしちゃいますが。

あと、FFのキャラを出すつもりは無いです。

5 s e c o m してますか？(前書き)

ここからは主人公視点で頑張っているかと思えます。

5 sec com しますか？

ええっと、紅魔館は妖怪の山の麓にある霧の湖の島の畔に建っているんだっただよな。

やっと到着したよ。

「うわ、赤いな。」

とりあえず、入れてもらうか。

ん？門からしか入れないように結界が敷かれているな。

僕様の能力ならこれ位のものは関係ないんだが…

喧嘩を売りに来た訳ではないし、ちゃんと門から入るとしようか。

あれ門番だよな。

門に寄りかかって寝てるけど門番でいいんだよな？

門番、寝てるよ…

それでいいのか？仕事しろよ。

とりあえず話しかけてみるか。

「おい、門番。起きろ。」

「んふふ。咲夜さん、もう食べられませんよう。」

「だめだこいつ、完全に寝てやがる。それにしてもこいつなかなかいい体つきだな。武術でもしているのか？だったら殺気に反応するだろうか？まあ、試してみるとしよう。」

「もう、咲夜さんたらそんなに寝めないで下さいよ。これくらい門番として当然のkな、何者！！」

「ふむ。やっと起きたか。」

「くつ、紅魔館に何の用かしら。お嬢様方に仇名す者を入れるわけにはいかないわ！！先手必勝！虹符「烈虹真拳」」

「僕はここの大図書館kうお！こいつ、僕様の話を聞く気がねえな。ならば、弾幕ごっここといくか！咆哮「波動撃」」

ちっ！力を抜きすぎたか。ぶつつけ本番などしない方が良かったか？いや、楽しまずして何がゲームか！反省などいくらでも出来るのだ。今は次のスペルカードについてだな。

「まだまだ早いですね。あなたのような子供が紅魔館を襲撃するにはまだ早いのですよ！」

「な、何だと！僕様を子ども扱いするんじゃない！くらえ！疾風「地裂斬」」

「は、早い！ならばこれでどう！気符「星脈弾」」

「これで終わらせてやるよ！焦点「ファイナルヘヴン」」

「それはこちらの台詞です！華符「彩光蓮華掌」」

「なかなかいい勝負だったぞ、お前。」

「うう、負けちゃいましたお嬢様。申し訳ありません…」

「おい、お前。名前はなんと言う？僕はルーウェイン・レアンナ
ーナだ。」

「うう、紅美鈴といいます。」

「そうか。美鈴、お前は勘違いをしている！！僕はここに襲撃を
かけに来た訳ではない。大図書館に用があつて来たのだ。」

「な、何ですとー！！し、しかし、私に殺気をぶつけてきたじゃない
いですか！」

「うむ。あれはお前がいくら声をかけても起きないので、武術も出
来そうだったし試しに殺気を放ったところ、お前が反応したのだ。
殺気に反応して僕様に襲い掛かって来たのは正しい事だし文句も言
わん。ただ、美鈴は門番だろう？寝るんじゃない！！」

「（うう、こんな子供に説教される私って…）「ちなみに僕は5
000年は生きているのだ。決して子供ではないぞ。」うえ！！マ

ジですか！」

「ああ、マジだ。」

「重ね重ねすいませんでした。」

「過ぎた事だもついい。それよりも僕様は大図書館に入れてもらえるのか？」

「それはいいm「申し訳ありませんが先にこの館の主人であるお嬢様に会ってもらえますか？」さ、咲夜さん！！い、いったいいつからそこに？」

「僕様との勝負が終わった頃からいたぞ。気づかなかつたのか？そしてメイドよ、僕様は構わないぞ。ああ、一応名乗っておこう。僕様の名前はルーウェイン・レアンナーナだ。」

「十六夜咲夜と申します。この館のメイド長をしています。以降お見知りおいを。さて、美鈴？ルーウェイン様の言っていたように私はあなたが負けた辺りからここにいたのだけど…あなたまた居眠りをしていたようね？」

「ええつとそれはあのえーつと。」

おお、修羅場が発生してある。頑張るんだ！美鈴！！まあ、無理だろうがな。

「後でお仕置きだから。さて、ルーウェイン様。御見苦しい所をお見せいたしました。申し訳ありません。紅魔館へようこそ。こちらになります。私の後についてきてください。」

「わかった。じゃあな美鈴。」

おお、中も赤いな。こんなところで暮らすなど目が悪くなるのではないか？いや、そんなことよりもこの館…

「なあ、咲夜。この館外見より大きくないか。僕は能力の関係上こういうことには敏感なんだが。」

「はい、私の能力により少し内部を改築いたしましたので。」

「ふむ。それならば咲夜と僕様の能力は似たようなものかもしれないな。」

「そうですね。着きました。ここがお嬢様のお部屋です。お嬢様、客人をお連れいたしました。」

「入っていいぞ。」

「ご苦労だったな咲夜。そして客人よ、私がこの館の主人、レミリア・スカーレットだ。」

「僕様の名はルーウェイン・イーリアス・シ・スーヤ・ム・ジカ・レアンナーナだ。」

「ようこそルーウェイン。確かここの大図書館に用があったのだたな。今日の私は機嫌が良い。許可してやろう。しかし、この吸血鬼にお願いをするのだ何か対価の一つくらいあるのだろうか？」

「（お嬢様ったら、素直にお土産、特にお菓子が欲しいとか言えばいいのに。でもこの素直じゃないところがまた可愛いわ。さすが私のお嬢様！）」

「（なにやら咲夜から変な空気が出ているのだが…）僕様の血でいいの？」

「違うわよ！妖獣の血なんて私の好みじゃないわよ！それよりもっとおいしいものを持ってん…すまない少し取り乱したようだな。血ではなく、この屋敷の住民が食べれるものがあるのだが。今お前が持っているもののような。」

「（ああ、早くもカリスマブレイク！！可愛すぎる！）」

「おお、これか？これはついさっきまでお世話になったところの者がくれたもので、僕様好みの味付けをしていると言われたので、レミアにあうかはわからんぞ？それでいいのならほらこいつを受けとってくれ。」

「（やったわ！おやつをゲットよ！）うむ、これならばみなで分けて食べられるだろう。ありがたくいただく。」

「（お嬢様、ルーウェイン様は一人で食べる気だと気づいていますよ…）」

「咲夜、ルーウェインを大図書館に案内してやれ。」

「はい、お嬢様。」

「ありがとう、レミリア。」

「さて、中にはどんなおやつが入っているのかしら？ おお、クッキーね！ おいしそー。じゃあ、いただきまーす。ちよつと味は濃いかどなかなかいけるわね。おいしいわ。それにしても何故私にだけ名乗った名前が違うのかしら？ わたしのカリスマに敬意を表して！？ ふふ、さすがは私ね。あら、もうクッキーがなくなっちゃったわ！ ！ど、どうしよう。咲夜に怒られる！！」

5 sec om してますか？（後書き）

スペルカードは非想天則より…

基本は時系列を守っていきたいけどメーリンはやっぱり近接格闘戦にする方がいいかな〜と思ったので。

後主人公に体術系のスペルカードを使って欲しかったから…
批判があれば変えようかなと思います。

後はカリスマブレイクはこんなんでいいのかな？

6 救助信号発信（前書き）

送ってもらって後はパチュリーとの絡みのはずだったのにどうしてこんなことに…

6話 救助信号発信 改め 咲夜さん暴走 の巻でござる

もうちょっとと字数を増やそうとプロットを無視した結果がこれだよ！

6 救助信号発信

さて、僕は今、咲夜に連れられ大図書館に向かっている途中のはずなんだが…

「ふふふ、さすがはお嬢様！可愛すぎるわ！！」

咲夜が急に立ち止まった挙句、言動がおかしくなりよった。

なにやら空間が固定されているような気がするのだが…

僕様の能力でこの不可解な現象は無効化できるから僕様に影響はないが。

もしや咲夜的能力は空間固定か？いや、さすがにここまでの痴態を僕様に晒さないだろう…

そして、僕様が今意識を持っているなど考えてないと見ていいだろうな。

あと、咲夜がこの館の空間をいじっている的な事を言っていたな。

「ああ、そろそろお菓子を食べ始めるころかしら。ルーウエインには悪いかもしれないけど、時間が止まっているんだし構わないわよねー！」

こいつ人が考察しているときいきなり答えをいいよったわ！！ついでに呼び捨てにしとるし。

まあ、僕はなんと呼ばれようとあまり気にしないし、敬称など僕の臣でもないから必要ないし構わないが…

ああ、行きよつた…

ずっと棒立ちとはいえ同じ体勢でいるのは面倒なんだが…

戻ってきたときに驚かすためだ。我慢しよう。

「ああ、お嬢様つたらそんな叱られることを期待されてはこの 咲夜！我慢できないではないですか！！おおっと、忠誠心が溢れそうに…」

咲夜がはあはあしながら戻ってきておつた…

忠誠心って…鼻血ではないか！！

まったく持って面白いなこいつ…

ふふ、僕様が能力の効果を受けてないと知ったらどう反応するかが楽しみだな。

そろそろ教えてやるとす「そつえば、ルーウエインもなかなか可愛いいわね。くっ！能力の行使中は生物に影響を与えることが出来ないのが残念だわ…」

能力の欠点を知れたのはいいが…こ、こいつ…僕様に何をするつもりだ…!

「せめてもう少しの間見て愛でさせてもらおうかしら…!」

くっ!ど、どうすればいいのだ…この後僕様に能力が効いてなかった事を教えたならこの言まで聞いていたと知られるぞ!

それは僕様的にも恥ずかしいぞ…!

こ、こうなったら時間停止中は僕様でも行動できないという風に装うか…

「尻尾がこの間だパチュリー様のところで見せてもらった本に載っていたライオンに似ているから…ライオンの妖獣かしら。耳はどこに?」

じつと見るなあ!周囲の時間が停止しているおかげで瞬きの必要がないのが唯一の救いか…このまま我慢すればしのげ!「無理だと解つていてもやはり一度抱きしめたい…!」

な、何だつて…!!ば、ばれるではないか…!

おいよせ、やめろ!近寄るな!このままではどちらも得をせんぞ!!待て、待てといってるだ!「えいっ!!あら?暖かいわ?触れないはずなのに。」

ど、どうしようか。

「これは私の力が進化したっ!!これで私ったら最強ね!!ふふ、

モフモフし放題。お嬢様にも後でしてきましょつと。さて、耳を探さないと…せつかくだしね！髪を上げて。あ、あったわ。まず耳をハムハムしないとね！！」

あつ！やめつ！それ以上撫でるなあ！耳をいじるなあ！

「ああ、可愛らしい。後は猫のように鳴いてくれればいいのd」あつ！「ん？」

しまった！気持ちよすぎて声を我慢できなかつた！！

「今明らかに声がしたのだけど…」

誤魔化せるか！？いや、無理だろうな…

「えっ？まさか私の能力が効いてない！！」

「くっ！ばれちまつたら仕方ない！！そつだよ！僕様に能力は最初から効いて無かつたよ！！」

「なつ！つまり最初から動けていたと！？」

「そつだよ！！効いているふりして驚かそつとした結果がこれだよ！！」

「い、いったい何故！？まさか私の能力が無くなつてしまつた！？いえ、先ほどお嬢様の様子を確認した時はちゃんと効果を發揮していたわ…」

「僕様の能力によって僕様だけ無効化したんだよ！あと、様子の確認なんて言い回ししないで素直に覗き見してたといったらどうなんだ！！」

「違うわ！！そんな変な言い方しないで頂戴！！あれは、お嬢様を見守るといふ崇高なる目的のためよ！！それよりもあなた。」

「なんだよ？」

「能力の効果外なのはあなただけなのよね？」

「そうだが？」

「つまりあなた以外に私の行動を知るものはいないと…」

「なんだ？殺る気か？それなら僕様も本気でやってやるぞ？」

「いいえ、美鈴に格闘戦で余裕で勝てるあなたに能力が効かない私が戦っても勝ち目は正直無いわ。」

「一応言っておくが僕様はこんな恥ずかしいことを誰かに言いつつもりは一切無いぞ…」

「それは良かった。」

ふう、これで話は終わったな…早く大図書館に連れて行ってもらおう…

「おい、この話はもう終わ」「ふふふ、どつせならもっとモフモフしちゃいましょうか。」

えっ！？嘘だろ！！

「ああ、可愛らしいわ。「こ」を「つ」するどどつなるのかしらっ」

「や、やめろ！抱っこするんじゃない！！くっ！！これほどまでに僕様のオートガードを疎ましく思ったことは無いぞ！！」

「うふふ、モフモフ。スリスリ。ハムハム。」

「あっ——————！！」

「うつつ、汚された……」

「失礼な！あなたも喜んでいただけでしょう！！」

「もうこの話題はやめだ！！早く連れて行ってくれ！」

「仕方ないわね…またやらせてね？」

「誰がさせるかっ!」

「ところで、気になったのだけど…」

「うん？ 僕様の能力か？ 僕様の能力は空間を操る程度の能力だ。普段から使っているわけではなく、むしろ封印しているのだが能力が強力すぎて周りに少し影響を与えるからな。そいつに防御というベクトルを向けている。これで僕様に影響を与えるものをすべてシャットアウトするのだ。博霊結界をすり抜けたのもこれが原因だと紫が言っていたな…」

「そうなの。いや、それが聞きたかったわけではなかったのだけど…あと、八雲と親交があったのね。」

「ああ、あの菓子は藍がくれた物だ。それで？ 聞きたかったことは何だ？」

「どうしてお嬢様に名乗った名前と私たちに名乗った名前が少し違うのかしら？」

「ああ、そのことか。もともと僕様の真名はお前たちに教えたりウエイン・レアンナーナの方だ。レミアに名乗った方はあちらの方が箔が付くかと思ったからだ。特に深い意味はない。ああいうときはあちらの名前の方が似合っているだろう？ そういうことだと思ってくればいい。」

「なるほど…中二病ってやつね？」

「中二病とやらが何かは知らんがとても嫌な感じがするぞ…」

「まあ、いいじゃないの。ほら、着いたわ。ここが大図書館よ。じやあ私はお嬢様の下へと行くからね。」

「いろいろあったがありがとつとっておこつ。」

「何かいろいろと含みがあるようだけどまあいいわ。じゃあね。」

よし、入るか。ここに僕様でも使える魔法・魔導書があるかもと思えばドキドキするぞ。

「な、何だこの部屋は！紫の言つてた通り本当に風通しが悪いし日当たりが無いな！本を置くにはいいかもしれんがここを書斎にしているのだろう！？馬鹿か？馬鹿なのかパチュリーとかいう魔法使いは！！」

「あはは。その通りかもしれませんがあまり悪く言わないでくれませせんか。」

「ん？誰だお前は？」

「私、パチュリー様の使い魔兼この司書である小悪魔です。個体名は無いのでコアと呼んでくだされば良いですよ。」

「そうか。すまん、言い過ぎた。僕様の名はルーウェイン・レアンナーナだ。」

「こちらへは何用で？」

「僕は昔、魔法を習っていたな。しかし、僕様に適性の有る魔法がなかったのだ。ここにはたくさんの方導書と魔法使いがいると聞いてな。もしかしたら僕様にも使える魔法が有るのではないかと思つてここに来たのだ。」

「そうですか。頑張ってくださいね。（パチュリー様が素直に教えてくれるとは思わ無いけど）」

「ああ。ただな、少し心配な部分もあるのだ。魔法使いにとって自分の魔法は大事だろう？教えてくれるだろうか…」

「（なんだ、そういうことはちゃんと理解してるのね）大丈夫ですよ！パチュリー様はお優しいですから。」

「そうだといいんだが。」

「では私は仕事があるので失礼しますね。」

誠心誠意お願いをして教えてもらわねばな。

ん？あそこに本の山があるが…

む！本の山から手が出ているではないか。

「むぎゅー。」

「（変な鳴き声だな…）今助けてやる。」

それにしても多いな…

「よし、大丈夫か？」

「むきゅ！だ、大丈夫よ。ありがとう、助かったわ。ゴホッゴホッ」

「おい、本当に大丈夫か？コアが咲夜を呼んできてやるのか？」

「本当に大丈夫よ。これは持病の喘息だから…」

「そ、そうか。いや、それは大丈夫じゃないだろう。ていうかこの環境が悪いんだろう。」

「いいのよ、私が好きでここにいるのだから。それで？あなたは何者？コアや咲夜とちゃんとした面識があるようだし侵入者じゃないようだけど？」

「僕様の名はルーウエイン・レアンナーナだ。ここへは僕様が使える魔法を探しにやってきたのだ。」

「そう、なら勝手に探すといいわ。」

「そうさせてもらう。あ、ちなみにお前の名前は？」

「ああ、名乗ってなかったわね。私の名前はパチュリー・ノーレッジ。ここの主よ。」

「お前がパチユリーだったのか。なら話が早い。僕様n「嫌よ。」
何故だ。」

「魔法使いがどうしてそうやすやすと魔法を教えるの？それに面倒
じゃない。」

「（絶対面倒だからだな…）僕様に適正の有る魔法を教えて欲しか
っただけなのに…それさえ教えてもらえば後は自分で何とかするの
に…」

「ちっ、いいわよ！適正を見てあげるだけだからね！だからそんな
目でこちらを見ないで…！」

おお、僕様の純真な瞳によるお願い光線にはさすがの魔女も敵わ
なかったか。

んん、誰だ！こんな計算ずくの奴が純真な訳が無いと思っている
のは…！僕様ほど純真な者など赤子ぐらいのものだぞ…！

おおっと、変な電波を受信したがこれはもう無視しておこう。と
りあえずパチユリーに感謝せねばな。

「ありがとうパチユリー！よろしく頼むぞ…！」

「なんか釈然としないんだけど…まあいいわ、ここの魔法陣の中に
立ってちょうだい。」

よし、これで僕様も魔法が使えるんだな…！

「ふう、判ったわ。」

「おお、それでどうだった！僕様にはどんな魔法が使えるんだ！！」

「（少し言いづらいんだけど一気に言った方がいいわよね…）残念ながらあなたに使える魔法は無いわ。」

「な、なんだってー！！」orz

6 救助信号発信（後書き）

咲夜さん可愛いよね。美人だよね。

書いてて自分で自分のキャラに軽く嫉妬しちゃいました（〃）
（〃）
<テへへ

東方キャラはみんな美人過ぎて困る。

7 グリモワール

僕様に使える魔法は無いということか…

はあ、魔法使えないのか…

もう初っ端から鬱です…

僕様です…

幻想入りした魔法も使えなかつとです…

こんなことなら来なければ良かったです…

もう次に何をすればいいのかすら分かりません…

僕様です、僕様です、僕様です「うつつしいわ！…いつまでもグダグダしないでちょうだい！」

はっ！僕様つては今なんか変な電波を受信していたような気がする…

「すまんなパチュリー。嫌な気分にしたか…」

「い、いえ、分かればいいのよ。()どうすればいいのよ！面倒だわっ！早く追い出してしましょ。」「()」

「魔法が使えないというならばここにはもう用は無い！！僕は新たな地へ旅立つぞー！！」

「そう、行ってらっしゃい。（追い出す手間が省けてよかったわ。）」

「ああ、行ってくる。ありがとな、パチュリー。」

さて、どこに行こうかな。適当に進むとす」「おや、ルーウェイさん。もう行ってしまうのですか？」

「ああ、美鈴か。もうここに用は無いからな。僕はどこかに行くのだ。」

「そうですね、またいらしてくださいね。では、お元気で。」

「おお、ではな。」

「適当にその辺をぶらぶらするか…」

まさか幻想郷の魔法まで使えないとはな…

はあ〜。

ん？ここはどこだ？鬱になりながら歩いたせいでここがどこか全く分からん。

ついでに言えばどのくらい歩いたのかも分からん。

「ん？何だこれは？」

辺り一面を飛び交う茸の胞子…

魔法の森か！？

何ということだ！無意識に歩いていたら魔法の森に着いていただと…

僕はどこまで魔法に未練を持っているというのだ！！

「くっ！早くここを立ち去ってしまおう！」

ふう、やっと抜けられたぞ。

今度はどこだ？何やら墓地のようだが…

そういえば紫が魔法の森を抜けた先には無縁塚があると言っていたな…

つまりここは無縁塚か？

なんだかごみごみしているな…

外の世界の物が落ちてくることも多いとも言っていたな。

これが全部そうなのか？

時代の流れとはやはり恐ろしいものだな…

どれ、暇だし少しあさっていこうか。

「どれもこれもガラクタだな。使えそうも無いものばかりだ。」

掘り出し物はなさそうだ。「何だこれは。ただの古本にしか見えん
のにとっても興味を引かれるぞ。」

「本の題名は：“The Zodiac Brave Story”
と。昔の戦記物か？」

どうせ暇だし読んでみるか。「な、何だこれは！？僕様の頭に何か
が入り込んでk！！僕sのオートガードが全く効いていないだt！
！」

戦士は剣を手に取り胸に一つの石を抱く
消え行く記憶をその剣に刻み

鍛えた技をその石に託す
物語は剣より語られ石に継がれる
今、その物語を語ろう…

我等がイシの継承者よ、汝の未来に幸多からんことを

「これは、いつたい…僕様の服装もいつの間にか変わって…そして何か、僕様の中に新たな力が流れ込んで来た、そんな気がする。いや、流れ込んで来ている！！」

何だこの力は！！全能感をこれほどかと満たしてくれるこの力はいつたい何なのだ！？

「今なら魔法も使えそうな気がする。呪文も頭をよぎるこの言葉で大丈夫だろう。いくぞ！」

“地に閉ざされし、内臓にたぎる火よ 人の罪を問え！ ファイア！”

僕様の詠唱と共に膨らんでいった魔力が唱え終わった瞬間に極大な炎に変わり辺り一面を火の海にした。

遂に僕様と適正の有る魔法を見つけたのだ！！

そう思ったときの僕様の感情は表現できるようなものではない。

嬉しかった。とにかく嬉しかったのだ。

「さて、せっかくだからこの魔法の系統に名前をつけよう。感覚的にこの本から魔法を受け継いだ感じがしたな。よし、この魔法を継承魔法と名づけよう!」

7 グリモワール（後書き）

中二病乙！

詠唱などはFFTよりです。

ちなみに、詠唱自体はファイジャのものです…

8 化えるパニック（前書き）

ケアル「清らかなる生命の風よ 失いし力とならん！ ケアル！

ケアルラ「清らかなる生命の風よ、 天空に舞い 邪悪なる傷を癒せ
！ ケアルラ！

ケアルガ「空の下なる我が手に、 祝福の風の恵みあらん！ ケアル
ガ！

ケアルジャ「波動に揺れる大気、 その風の腕で 傷つける命を癒せ
！ ケアルジャ！

8 化えるパニック

今僕は魔法の森に戻ってきている。

さて、遂に手に入れた魔法。

ただし、なにやら魔法だけを継承した訳ではないようだな…

技能をまとめると

白魔法・黒魔法・時魔法・召還魔法・不浄魔法・次元魔法・究極魔法・完全飽和魔法

陰陽術・真言術・裏真言術・星天術・闇魔術・恐怖術・暗雲術
拳術・刀術・聖剣技・暗黒剣技・剛剣技・破壊魔剣技

と、21種類も…

継承はしたがいくつか決闘には使えそうも無いものもあるし、好みでないのもあるようだな…

僕は死合いがしたいのではなく、魔法を使いたかったただけだから構わないか。

ま、威力もざっと見て僕の攻撃力に劣るし遊びにはちょうどいいだろう。

こいつらを使ってスペルカードを作るとするか。

「まずは何にしようかな。とりあえずさっき使った魔法は決定だな。」
「しかし、せっかく手に入れた技能なのだ。使わないというのはもつたいない。空打ちなら構わないよな…」

よし、この星天術に真言術等を使ってみよう。

「天球の運命をこの手に委ねよ 我は汝、汝は我なれば… 星天停止！」

「五行に宿りし神々の震天動地の霊威を借りて唱えん… 天魔鬼神！」

「普天率土に宿りし神々の震天動地の力 暴威をふるえ！ 裏天魔鬼神！」

ぬお、意外と威力があるな…制御が面倒だ！

次は僕様の好みじゃないものを…

「微塵の憎悪の無尽なる業をその身に知れ… バイオガ！」

おお、木が石になりおつた。

次は相手がいないと発動せんだろうが面白そうだから…

「か〜え〜る〜の〜」 だい がっ しょ〜！「ルーウ
エイン様！先ほどのはいったい何g」トードジャ！「きゃあああ
っ！！」

あつ、やべ…藍が範囲内に入った。

どうしようか、カエルになっちまったよ…

九尾だけが面影として残っていやがる…

九尾を生やしたカエル…ぶっちゃけキモい。

ああ、なんか現実逃避してる間に向こうも状況把握して僕様を睨んできている、ような気がする…

ああ、妖気を放出して鳴きながら僕様を殴ってきた。い、痛い！精神的にとても痛いぞ！！

カエル化したせいでかなり弱体化したので物理的には全く痛くないが、先ほど良くしてもらった相手にこのようなことをしてかしてしまったのが心に痛い！

- - 《藍side》 - -

何が起こったのか解らない。何故私がこんな姿に！！

とりあえず一つ一つ順に行動を思い出そう。

先ほど魔法の森で変な現象が起こった。

私は突然起こったその変な現象の原因を探るべく、魔法の森に自身の出しうる速度を出し切って向かった。

魔法の森には紅魔館へ行くと言っていたルーウェインがいた。

きっとルーウェインも突然の現象に驚き、原因を探りに来たのであろう。

私は彼にどこまで調査を終えたのかを尋ねようと彼の前に降り立とうとした。

するとこの姿になってしまったわけだ…

解らない。全く解らないぞ！！ルーウェインも目の前で起こった不可解な現象に現実逃避をしている。

とにかく、このような現象になってしまった原因が解らないじょう早々にここから脱出するべきだ！

「（おい、ルーウェイン早くここから脱出しよう！さもないとお前までこのような姿になってしまうぞ！！）ゲロ、ゲロゲロゲ！ゲロゲロゲロゲ！」

…《藍side out》…

とにかく、早く元の姿に戻してやらねばっ！！

えーと、もう一度同じ呪文をかければいいのだな！

「か〜え〜る〜の〜〜〜だい がつ「あっ！ルーウェイン様！！藍さまを見k」 しょ〜！ トードジャ！！」にやあああ

「!!」

なんとということでしょう！藍を元に戻そうとかけた呪文の効果範囲に橙が飛び込んできました！！

「ちええええええん！！」

あ、藍はちゃんと戻ったのか。

「ちええええん！大丈夫か！？意識はあるか！？」

うむ、藍め、かなりテンパっておるな。まあ、仕方あるまい。自分におきた不幸が身内にもおきたのだ。そして僕様がやらかしたということには気づいてないようだな。

だれだ！現実逃避良くないとか言うやつは！！僕様だっつてこうなるとは予測して無かったわ！！まさか藍が来て、橙が来るなんて誰が予測できるものか！！出来たやつは未来人だ！！

おおっと、僕様もかなりテンパっているようだ。また電波を受信した。最近多いな…

それよりも早く直さねば。

また同じ間違いをせんように次は解除の呪文にしよう。トードをもう一度かけて直そうとしたから先ほどのミスは起きたのだ。

「藍、すまない。今から橙を直すから少し離れて待ってくれ。」

「出来るのか！！頼む！橙を助けてやってくれ！！」

「はい、わかりました。しかし、先ほどのようなことがまたあるかもしれません。一度、森を出しましょう。」

「あのだな、その事についてはもう大丈夫だ。今からそれについて説明をする。」

「おお、もう原因がわかったのですか。さすがです。おや、そこにいるのはアリス・マーガトロイドじゃないか。まさかお前がやったのか!？」

「違うわよ。私はここで誰かが大規模な実験をしているみたいでうるさいから奥へ行けと言いに来ただけよ。」

「ああ、藍。彼女は関係ない。今から話すから聞いてくれ。」

実はな、先ほど僕様は魔法を使えるようになったのだ。無縁塚で拾ったこの魔導書のおかげでな。そしてとても上機嫌になった僕様はその魔法で、決闘には使えそうも無い、隙が大きすぎたりする魔法を空打ちしてみたくなった。多分、藍が気になった現象はこれのことだろう。

その後、僕様は僕様の趣味ではない、スペルカードに使わないであろう魔法を試してみることにした。一つはほら、あそこに石になった木があるだろう。それで解ると思うが石化魔法を使ってみたのだ。

次に使ってみたのがだ、対象を力エルにする魔法、トードだった。この魔法は対象を動物に限るからな。当然無駄打ちになるはずだった。だったのだがだ!藍が僕様の前にやって来てしまったのだ。普

通藍程の者なら失敗するはずだったのだが、藍が僕様に警戒するわけもなく、あっさりかかってしまったのだ。

この魔法の解除方法は同じ魔法をかけてやれば良いからな。僕様は藍を元に戻そうとトードをかけた。

するとまたしてもその詠唱の最中に橙が藍を探してやって来たのだ。そうして、藍は元に戻ったが今度は橙が力エルになってしまったというわけだ。」

「なるほど。つまりは全てお前のせいというわけだな！」

「ああ、そうなる。すまん、反省している。悪かったな藍、橙。」

「はあ、まあ結局は戻ったので良しとしよう。しかし、何故アリスは力エルにならなかったんだ？」

「そうね、私も警戒はしていたけれど、あなたがそこの式を戻すときに出くわしたわよ？そしてレジストしたけどそれは悔しいけどあっさり破られたわよ？」

「ああ、それはだな。また誰かがやってくるかもしれないと思った僕様が魔法を変えたのだ。」

「ならば何故私るときもそれをしなかったんだ？」

「それはだな、あまりこの魔法をお前たちに使いたくなかったからだ。ほら、橙を見てみる。猫又になっているだろう。この魔法は問答無用で対象者の状態を元に戻すのだ。だから人化の術も解けてしまう。ああ、式は外れてないぞ。ともかく、こういう理由で妖獣とかにはかけたくないのだ。」

ちなみに、これは僕様が魔法を使えるようになったのがついさっきだからで、きちんとマスターすれば任意の者にだけ、解除したい者だけという風に使えるようになるぞ。」

「ああ、なるほど。それで、先ほどから式が猫の姿をしているのね。さて、疑問も解決したし私は戻るわ。あなたの魔法には興味があるけどね。」

「うむ、わかったぞアリス。ああ、僕様の名はルーウェイン・レアンナーナだ。」

「そう、じゃあね、ルーウェイン。」

「さて、藍に橙よ、ほんとーに悪かったな。今度からは周り良く見てからすることにする。」

「もう止めてくださいよ!?!?!」

8 化えるパニック（後書き）

今回は前回に引き続きどうしても文章が少なくなってしまうたのでプロットをいじってみました。

そうしてこんな結果に…

ごめんよ、藍様・橙。

ちなみにもともとはルーウエイン一人で今後使いそうにない魔法をただひたすら使っていくだけで、1000字を少し超えるぐらいでした。

しかも内容が当然のようにとてもつまらない！
全消し余裕でした！

寝不足の頭で組んだものなぞ頼ってはいけませんね…

さあ、これからも頑張って生きたいと思えます。
皆さん、応援よろしくお願いします。

？ 馬鹿は風邪を引かないのではない、その事実気づかないのだ（前書き）

レイズ「生命をもたらしたる精霊よ 今一度我等がもとに！ レイズ！

アレイズ「生命を司る精霊よ、失われゆく魂に 今一度命を与えたまえ！ アレイズ！

リレイズ「大気に満ち、木々を揺らす波動 生命の躍動を刻め！
リレイズ！

？ 馬鹿は風邪を引かないのではない、その事実気づかないのだ

ぬう、橙めあそこまで怒らなくても良いではないか。

こつというのは何度も使うことで威力や範囲などの制御がしやすくなるというのに…

ばれなけりゃ良いか。

さて、僕様も魔法を使ったスペルカードをいくつか用意した。

後は誰か相手になってくれる者がいればいいのだが…

魔法の森は妖怪などが少ないとか紫が言っていたな。

アリスに相手を頼むのはあまり面白くない。

紅魔館の連中たちも同様だ。

八雲に頼んだ瞬間に橙が、なし崩しで藍、面白がって紫と3人まとめて相手にすることになりそうだ。得たばかりの魔法でそれはさすがにきつい。

むう、どうしようか…

そういえば紅魔館に行くときに通った霧の湖ではまだ誰とも会ってないではないか。

よし、そこへ行って、会った奴に勝負を挑もう。

む、あそこにいるのは妖精か？さすがに妖精を相手にするのはやめておくか。ただの弱い者いじめにしかならん。向こうもいくら妖精でもさすがに僕様に喧嘩を売ってきたりはしないだろう。さて、相手を探すとするか…

「ねえ大ちゃん。次は何する？あの赤いところでいつも寝てるやつに落書きでもしてこようかな。」

「チルノちゃん、この間も同じことして門番の人に怒られたよね…」

「そういえばそうだったわね。くっそく仕返しに行ってやるうかしら。なんたってあたいつてばさいきょーだからね！」

「意味が解らないよチルノちゃん…」

「あら、あつちに誰がいるわ。あたいのさいきょーばわーでかちこちに凍らせてやるんだから！」

「あ、待ってよチルノちゃん。」

ん？妖精がこっちに近づいてきているのか？ま、おおかた好奇心でだろう。妖精っていうのは子供みたいなものだからな。妖精など

に構っている場合ではないのだ。僕様の魔法を使った初の実戦という名誉ある役柄に付くのはいいだ「ねえ、ちょっと。あたいの力を見せてあげるわ！氷符「アイシクルフォール」」

「チ、チルノちゃんまずいよ格上すぎるよ…」

「ぬお、いきなりなんだ。」

「くっそ、うまいこと避けたわね！次はこれよ！！食らえ！雷符「ヘイルストーム」」

「おお、妖精にはなかなかやるではないか。仕方あるまい、お前で妥協しよう。僕様の魔法の餌食となれ！裂光「サンダー」」

「きゃあ！な、なかやるわね！まだまだいくわよ！凍符「パーフェクトフリーズ」」

「（手加減も難しいがこれを期に覚えるでしょう）ふふふ、当然だ！僕様を侮るなよ！！食らえ！火罪「ファイア」」

「あ、熱いわ！！ま、まだまだ行くわよ！雪符「ダイヤモンドブリザード」」

「ならこれでどうだ。呪縛「グラビデ」」

「か、体が重いつ！でも、あたいは最強なんだから！まだまだ行くわ！霜符「フロストコラムス」」

「ふふ、そうでなくては面白くない。激震「クエイク」」

「や、やったわ！スペルブレイクしてやった！ふふん、あたいの勝ちね！」

「まだ終わりではないぞ。次はこれだ！虚空「ブリザド」」

「そうね、あたいがさいきよーってことをきつちりその身にきざむと良いわ！凍符「コールドディヴィニティー」」

「おお、こいつもブレイクされてしまったか。」

「いまなら前々から考えた技が使えるそうね！これで最後よ！くらいなさい！！凍符「マイナスK」これまでのスペルカードの集合体よ！」

「集大成と言いたいのか？（ふむ、下級魔法は使いきってしまったな。妖精だからと侮りすぎたか）まあいい、僕様もこいつで決めてやろう！冷刻「フリーズ」ふふふ、更に周囲の気温を冷やしてやるぞ。」

ふん、まあ当然僕様の方が威力があるか…まあ、当たるぎりぎりのところで消してやるとしよう。さすがに妖精相手に危ないk「きやあっ！！！」

「大ちゃん！」

「ぬお、急に力を抜くな！もうちょっとで制御しきれなくなるところだった。っておい、大丈夫か！？…ふむ、僕様たちの技がぶつかったときの余波か…」

「大ちゃん、大丈夫!？」

「おい、氷精。そこをどけ、僕様がそいつをきちんと癒してやる。」

「波動に揺れる大気、その風の腕で 傷つける命を癒せ! ケアルジャ!」

「ねえ、本当に大丈夫なの? ねえったら…」

「安心するがいい、もう大丈夫だ! 僕様が使える最高位の治癒魔法を使ってやったのだから! 今は先ほどの衝撃で気絶しているだけだ。そろそろ起きて「あれ、チルノちゃん。」ほらな。」

「ああ、良かったよう大ちゃんが無事で…」

「そういえば私…さっきチルノちゃんたちの技がぶつかったときのしょーげきで吹き飛ばされたんだっけ…」

「うむ、その通りだ。すまんかったな、周りの事を考えていなかった。(先ほどのカエルの一件で周囲には注意しようと思っていた矢先にこれとは…僕様はとても恥ずかしいぞ。)」

「あ、相手の人…あの、私がいつまでも周りをちよろちよろしていたのが悪いんだしそこまで責めなくても…」

「いや、反省させてくれ。ところで、僕様はまだお前たちに名前を名乗っていなかったな。ルーウェイン・レアンナーナだ。」

「そう、あんたえくとルウェイン…なんだっけ?」

「忘れるのが早すぎるよチルノちゃん…しかも間違ってるし…」

「わはは、別に構わないぞ！もし覚えにくいならルーと呼んでくれればいい。」

「そう、じゃあルーって呼ぶわ。あつ！さいきょーなあたいの名まえはチルノっていうの。」

「わたしは大妖精といいます。あつ、でもこれは名まえじゃないし、わたし名まえがないからみんなには大ちゃんって呼ばれてます。」

「そうか。それでチルノよ、どうして僕様に勝負を挑んできたの？」

「あつ！そういうえさっきの勝負はどうなったの！？たしかあたいの勝ちだったと思うんだけど。」

「いや、さすがに妖精には負けんぞ…チルノは妖精のわりに強かったのは認めるが。」

「そう…あたい、負けたの…」

「だ、だいじょーぶだよチルノちゃん！ルーさんみたいに強い妖怪にも強かったって言われたじゃない！！」

「でも、さいきょーじゃないもん…」

なるほど、汝、自らを持って最強を証明せよ。ってか…

道理で明らかかな格上である僕様に突っ込んでくるわけだ。

確かに先ほど言ったようにチルノは強いだろう。妖精の中ではと
いう括りが付くが…

しかし、その勇気を評価しても良いかもしれん。

妖精は自然から生まれた。つまりは自然が無くならない限りは不
死身といっても良いだろう。ただ、大妖精を見て解るように瞬間的
な再生という訳ではないようで、痛みも感じるみたいだ。

痛みがあるのだから自然とそういうものに恐怖を抱くはず…

それでも突っ込んでいくのだ評価してもいいな。

強くなるために必要な事として、意思・向上心・勇気は大切なこ
とだ。

チルノはもしかすると化けるかもしれんな…

「ねえ、ルーったら。さっきから何をそんなむずかしそうな顔して
るのよ。そんなんじゃないかみかんにしわがよるわよ！」

「ん？ああ、すまん。少し考え事をしていた。それでみかんに皺
が寄るんじゃないぞ、眉間に皺が寄ると言うんだ。（ま、こんなふ
うに馬鹿なのだありえんだらう。）」

「そんなことはどうでも良いわ！ねえ、あたいたちと遊びましょう。」

? 馬鹿は風邪を引かないのではない、その事実気づかないのだ(後書き)

? っぽく書くって難しい...

10 反省しない者に未来は無い（前書き）

ファイア「岩砕き、骸崩す、地に潜む者たち 集いて赤き炎となれ
！ ファイア！

ファイラ「地の砂に眠りし火の力目覚め 緑なめる赤き舌となれ！
ファイラ！

ファイガ「地の底に眠る星の火よ、古の眠り覚し 裁きの手をかざ
せ！ ファイガ！

ファイジャ「地に閉ざされし、内臓にたぎる火よ 人の罪を問え！
ファイジャ！

10 反省しない者に未来は無い

チルノたちに遊ぼうと誘われた僕様だがいろいろと思うところがあつて断つた。

そのときにまた少し騒動があつたのだがこれは割愛させてもらおう。

さて、僕様だが未だに霧の湖にいる。少しの間ここにいるつもりだ。

一応言っておくが、今は戦意が無い。つまり弾幕ごっこの相手を探しているという訳では無いということだ。

どうやら僕様は継承技能を完全にものにする必要があるらしい。

もともとそのつもりではあつたのだが…

なにやら僕様が未熟なまま魔法を使うとトラブルが起きるようなのだ。

カエルパニックしかり、チルノとの弾幕ごっこしかり…

のんびりとマスターするつもりだったんだけどなあ。

まあそんなこんなで僕は今、霧の湖で能力を用いた結界内に一人で、魔法を乱れ打ちしている。

「ふう、まあこんな感じで良いだろう。魔法はマスターした。」

誰だ早過ぎるといふのは！

仕方ないだろう、誰が好き好んで作業ゲーを晒すというのだ！

む、いかんいかんまた電波が…

「さて、魔法はあらかじめマスターした。次は体術などだが…これはゆっくりで良いか。」

「ならば次は何をしよう…やる事が無くなってきたぞ。」

そういえば僕様の能力は空間操作だったな…

空間を操って立体魔法陣など作れないか？

少し試してみるか…

まずは普通に「天と地の精霊達の怒りの全てを 今そこに刻め！
サンダジャ！」

そして次に立体魔法陣で。ってどうすりゃ良いんだよ…

魔法陣を立体的に描くってどうすりゃ良いんだよ！！

いや、焦るな！まだ慌てるときじゃない。時間はたっぷり有るのだ頑張ろっ…

この普通に使ったときに現れる、平面魔法陣を膨らませばいいのだ。

もしこれで立体魔法陣が成功しても何も影響を与えなかったらどうしてくれるようか…

いや、もし立体魔法陣が出来たらいろいろとメリットがあるはずだ！大丈夫、損することはないっ！！はず…

ここをこうして、そこをああして。

いやそれだとここが薄くなるからだめだ。

じゃあここをこうか？

よし、ここはこれで良いだろう。

次はここを…

ふう、これで、やっと終わった！！

まさかあれをああすればいいとは…

何でもやってみるものだ…

む、なにやら結界の外が紅いんだが、まあ僕様には関係ないしいか。

後はこれを応用して、他の魔法も…

よし！！全部終わった！

組み込みは完了したぜ。

後は実際に使ってみての最終調整だな！

ぬう、まさかあんな欠点があるとは…

よし、改良だ！！

幸い？問題があったのは一部の上級魔法だったから数は少ない！

こ、今度こそ終わった…

少し休むとしよう…

かなり疲れt… z z z

うん、よく寝た！！

ふう、いろいろといじるのは楽しかったがここまで疲れるとは…

うん？いつの間にか外が元に戻っているな。

何があつたんだろうか？

それにしても、僕様の能力ってここまで汎用性が高いとはな…

まあ、これのおかげで！

「僕様は更なる高みへ登れるぞ！！」

ちなみに、立体魔法陣のメリットは威力の大幅増加、コントロール、持続性、収束性とここまででもとんでもないのに更に！立体化したことにより魔法陣の範囲を広くすることにより気づかれにくくなったのだ！他にも、魔法陣内に相手を閉じ込めて超零距离魔法も

使えるという鬼畜仕様！！

僕は今更ながらに自分の所業を恐ろしく思うぞ！

さすが天才的頭脳の持ち主である僕様だ！！

わははははは！笑いが止まらんわ！

さて、あの霧の正体も気になるし紅魔館に情報収集でも良くか。

」頼もっ！…！」

11 デュアルインパクト（前書き）

サンダー「まばゆき光彩を刃となして 地を引き裂かん！ サンダー！

サンダラ「暗雲に迷える光よ、我に集い その力解き放て！ サンダラ！

サンダガ「天空を満たす光、一条に集いて 神の裁きとなれ！ サンダガ！

サンダジャ「天と地の精霊達の怒りの全てを 今そこに刻め！ サンダジャ！

11 デュアルインパクト

紅魔館に着いた…

着いたのだが…

なあ、美鈴よ…お前はいつも寝ているのか？

お前の仕事は何なんだ？門番だろう？

門を守れよ…

「ええい！！さっさと起きんか！」

「うっん、後5時間…」

「ハ・ヤ・ク・オ・キ・ロ」

「な、なに！！あ、ルーウェインさんじゃないですか。どうしました？何か紅魔館に御用でも？それと、つい先ほど何かヤバイ感じの気配がしたんですが知りませんか？」

こいつ、寝ていたのを反省してないな…

「黙っちゃってどうしたんですか？」

「美鈴よ、門を守らんお前など唯の阿呆だ!!」

「ひ、ひどい今回はグウゼンデスヨ。」

「この前来た時も寝ていたではないか。」

「ソ、ソレモグウゼンデス。」

白々しい。おい、僕様に目を合わせてしゃべらんか。

む、空間が止まった。咲夜か…

「久しぶりね、3ヶ月ぶりかしら、ルーウェイン。ここには何用かしら?」

「そんなに経つのか?久しぶりだな咲夜。それと、挨拶しながらにじり寄ってくるな。」

「な、何の事かしら?」

「はあ、別にそれ以上寄ってこなければ言うことは無い。それと、僕様が来た理由だったな。こないだの紅霧について聞きに来たのだ。お前たちなら何か知っているのではないかと。」

「そう、残念だわ。私に会いに来てくれた訳じゃないのね…」

「何だその演技は…」

「乗ってくれても良いじゃない。ああ、情報の件なら構わないわ。お嬢様のところにいきましようか。」

「あ、今回は土産を僕は持ってないぞ？」

「構わないわ、前はあなたが持っていたからねだったただけだと思うしね。」

「お前、レミリアが実は嫌いなんじゃないか…」

「何を言うの、お嬢様こそ私の真理よ！お嬢様ったら強く、気高く、可愛くほかにも e t c e t c …」

「もういい、聞いた僕様が馬鹿だった。」

「まだ半分もお嬢様の魅力を語れていないわ。」

「もういいといたただろう…ところで咲夜よ、美鈴は良いのか？言い訳している最中に止められたからか阿呆みたいな顔をしているぞ？」

「ああ、美鈴ね。もちろんお仕置きをするわ。」

ニヤリと咲夜が晒す。ナイフを取り出しながら晒す様は怖い…

しかし、僕様としてはそのお仕置きに興味がある。僕様にもやらせてもらえないだろうか…

「いいわよ。そんな不思議そうな顔をしないでちょうだい。顔に自分もやりたいってかいてあったわ。」

「よし、じゃあどうしてやるうか？」

「ほんとに今日のはたまたまですってば。信じてくださいよ……」

「ふうん。2度も連続で見ってしまうとどうも信じられんなあ。咲夜にでも聞いてみるかなあ。」

「そんなあ、咲夜さんには黙っててくださいよう。たいがいのことはしますからあ。」

「ほう、咲夜よ。こいつここまでしてもばれたくないと思っているようだぞ。お前はどつするんだ?」

「そうね、どつしてやるうかしらルーウェイン?」

「あ、あれいつからそこに?」

「あなたが言い訳を始めたころからよ。そうだったわよね、ルーウェイン?」

「ああ、その通りだぞ、咲夜よ。」

「ど、どつしてそんなに仲良しに?」

「あら、私とルーウェインが仲良しじゃいけないのかしら?」

「この前来た時に仲良くなっただけだというのになあ?」

「ど、どつしてそんなに綺麗な笑顔なんでセウカ?」

「あら、綺麗だなんて照れるじゃない。ねえ、ルーウェイン？」

「そうだ、照れてしまうなあ、咲夜。でもな美鈴？」

僕様たちは美鈴の斜め前に立ち、浮かべていた笑顔を瞬時に消し、美鈴の肩に手を置き、同時に、無表情でこう言っただけだった。

「それが今必要なこと（か）？」

「うん、ごめんなさい〜。」

む、やりすぎたか？ 気絶しよった。まあ、いつも居眠りしているようだしこれぐらいが妥当かな。これで居眠りがなくなれば良いが…

余談だが

美鈴の居眠り癖は無くならなかった。

ただ、今までは居眠り中幸せそうな顔をしていたのが時たま、うなされてるらしい。

トラウマにはなったが悪癖は無くならなかったらしい。

またしてやろうか…

11 デュアルインパクト(後書き)

思っていたよりも長くなったので分割!

12 あそびましょ（前書き）

ブリザド「闇に生まれし精霊の吐息の凍てつく風の刃に散れ！
ブリザド！

ブリザラ「虚空の風よ、非情の手をもって人の業を裁かん！
ブリザラ！

ブリザガ「無念の響き、嘆きの風を凍らせて忘却の真実を語れ…
ブリザガ！

ブリザジャ「大気に潜む無尽の水、光を天に還し 形なす静寂を現
せ！ブリザジャ！

12 あそびまじよ

レミリアの部屋の前までやってきた。

それにしても美鈴の奴め、あれで門番なのか？

仕事中に寝ていたのもそうだが、近接戦闘の出来る妖怪のくせに気付けしても起きんとは…

いや、もうこのことは忘れよう。美鈴も反省しただろうしな。

「どうしたの、ルーウェイン。お嬢様が待っているわ。早く入ってちょうだい。」

「ん、そうだな。入るとするか…レミリア、入るぞー！」

「いらっしやい、ルーウェイン。何用かしら？」

「ちょっと聞きたいことがあってな。しかし、どうしてパチュリーがいるんだ？」

「あら、パチュリーは私の友達よ。いたらだめかしら？」

「いや、気になっただけだ。うん、久しぶりだな。お前は可能な限り大図書館から出ない奴だと思っていたぞ。」

「失礼ね。人はパンのみに生きるにあらず、魔女は本のみに生きるにあらずよ。それで？聞きたいことって何かしら？」

「おお、そうだったな。この間な、僕様が霧の湖で魔法の練習をしていたときの話だ。僕様は結界を張っていたからしばらくの間気付かなかったんだが、周囲が紅い霧で覆われていたのだ。そのときは魔法の練習に忙しかったから動くに動けず、いつの間にか霧が晴れておった。僕様はこれの正体が知りたくてな、紅魔館の連中なら知っているのではないかと思ってここに来たのだ。」

「ああ、そのことか。あ」「教えてあげても良いわ。その代わりに、何故あなたが魔法を使えるようになったのかを教えなさい！」パチエー！！私のセリフをとらないで！」

「レミイ、カリスマ。」

「あーこ、これはその…忘れなさい！！」

レミリアをいじるのも楽しそうだな…

「な、何かしら？」

「いや、なんでもない。それで紅霧についての情報の対価は僕様が魔法を使えるようになってからの経緯でいいのか？」

「ええ、それでいいわ。」

「わかった。簡潔に順を追って説明しよう。
お前に魔法の適正が皆無と言われた僕は、意気消沈したままその辺をぶらぶらと歩いた。

いつの間にか魔法の森にいて、そこまでがっかりしていた自分に驚いた僕は、魔法の森を無茶苦茶に走り回った。

これまたいつの間にか無縁塚にいた僕は、適当にぶらぶらと歩いていた。

そうして一冊の古めかしい本を見つけた僕は、好奇心のままにその本を手に取り開いてみた。

すると、僕の頭にいろいろな知識が入ってきた。
それが魔法の知識だったわけだ。

その後は、魔法の森でスペルカードに向かない魔法を使ってみたりした。

そして、霧の湖で氷精と弾幕ごっこをした。
後は先ほど言ったように、魔法の練習をしていたのだ。」

「そう、あなたよく無事だったわね…頭に知識が流れ込んでくるタイプの魔道書はとっても難しく、ベテランの魔法使いでも時たま廃人になってしまうほど強力なのよ…」

「ぬおっ！！そ、そんなに強力なのかこいつは…」

「（そんなに強いのかしら？まあ、とてつもないカリスマを持つ私ならしつかりと扱いきれるでしょう。少し読んでみたいわね…）ル
ーウェインよ、私は少し興味が湧いたぞ。みせてくれ。」

「おう、これだレミリア。」

「（今、危ないと言ったばかりでしょう！！てゆうか、自分の魔道

書をたやすく渡すな！！まったく、レミイはともかくルーウェインもアホの子だったのね……）ちよつとレミイ、やめておいた方が良いわ。あなたはこの紅魔館の主なんだから遊びで分の悪い賭けをしないでちよつと。親友としてもあなたが心配だからやめて欲しいんだけど。あら咲夜、どうしたのかしら？」

「いえ、なんでもありません。（ちよつと妄想しただけです。それにしてもルーウェインがいると能力を使つてお嬢様を堪能できないのが痛いわね……いや、いつそのこと巻き込んで……）お嬢様、メイドごときが意見を挟んで申し訳ないのですが、私としてもそのようなことはして欲しくありません。」

「そう、そこまで言われたら止めておくわ。ああそれと咲夜、あなたはメイドという職についているけれど、私の家族でもあるのだから言いたいことはちゃんと言いなさい。（まったく、照れるじゃない。二人そろつて私のことをこんなに大事に思ってくれているなんて……）」

「はい、お嬢様。（ああ、お嬢様がカリスマに溢れていらつしやる……）」

「すまんレミリア、軽率すぎた。」

「私が読みたいと言つたのだから構わないわ。代わりにあなたの魔法をみせて……おねーさま……！！」あら、どうしたのフラン？」

レミリアが何か言おうとしていたのを遮るように扉が開き、そこから女の子が出てきた。

どうもレミリアの妹らしいな。

羽の形が変わっているがきつとそうだろう。

前回来たときに、主要な人物には全員会ったと思っていたがまだだったらしい。

「さつきね、暇つぶしに図書館に本を探してたときにね、誰か来たなあと思ったの。それで近くにいた小悪魔に聞いたら、この前来ていた妖怪がやってきたって教えてもらったんだ。それで、見に来たの。ねええ、あなたがその妖怪さん？」

なにやら興味津々と言った様子でレミリアからこちらに顔を向けてきた少女が僕様に問いかける。

「そうだ。僕様の名はルーウェイン・レアンナーナだ。」

「私はフランドール・スカーレットだよ。ねえ、一緒に遊ぼう？」

「（まあ、ルーウェインの実力は知らないけど、フランが遊びで能力を使って一撃必殺すると思えないし大丈夫でしょう。魔法が見たいからちょうどいいわ。）頼んでもいいかしら、ルーウェイン？紅霧については後で話すわ。」

「構わないぞ。じゃあフランドールよ、何をして遊ぶんだ？」

「弾幕ごっこしましょう？」

「よし、なら外に出ようか。」

「ふふふ、簡単に終わらないでね。私はいっぱい遊びたいんだから……」

12 あそびましょ (後書き)

バトル描写、うまく書けるようになりたいなあ…

13 おゆづぎかい（前書き）

ホーリー「汚れ無き天空の光よ、血にまみれし不浄を照らし出せ！
ホーリー！

フレア「滅びゆく肉体に暗黒神の名を刻め 始源の炎甦らん！ フ
レア！

メルトン「神の手より滴る灼熱の混沌へ 天地創造の火よ… メル
トン！

トルネド「行方知らぬ風たちよ、我が声に集え 天空への門を開か
ん！ トルネド！

13 おゆうぎかい

さてと、庭に出てきたところで弾幕ごっこだ。吸血鬼である彼女たちが外に出ても大丈夫な時間帯、つまりは夜だ。

しかし、フランドールの目が怖いんだが…

ぬうう、本気を出さねばならんかもしれん。

負けても命に別状は無いとわかっていても、負けるのは嫌だからな。

では始めるとしようか。

「フランドール、スペルカードは何枚だ？」

「じゃあ、いっぱい遊びたいから10枚！」

「うん、わかった。では始めようか！」

「いっくよ〜！禁忌「クランベリートラップ」」

ぬう、避けにくい弾幕だ！

やはり実力者となるとチルノのようにはいかな。

よしここで僕様も一枚使っておこうか。

「喰らえ！天門「トルネド」」

こいつでフランドールの弾幕を返すまでは無理でも消してやれればっ！

「すごい！私のスペルカードがかき消されちゃった！！でもいいの？こんなのを序盤から使っちゃって？まだまだ始まったばかりだよ？」

「安心しろ！今のは中級魔法だ！！ほらよ、こいつを喰らえ！！煉獄「フレア」」

-. -. G y a l l y -. -.

「ほう、ルーウェインの魔法もなかなかのものね。」

「ちょっと！あの魔法陣は何！？」

「パチユリー様？どうかしたのですか？」

「どうかしたなんてもんじゃないわ！何よあの立体魔法陣は！？あいつ魔法を使えるようになってたっただけ月であんなことまで出来るなんて！冗談じゃっごほっごほっ」

「大丈夫ですか、パチュリー様？館に戻られた方がよろしいのでは？」

「そ、そうするわ…ありがとう、咲夜。」

.....

「熱を集めた魔法のようね。でもこんな単調な弾幕じゃあスペルカードを使うまでも無いかな。こんな楽なのはグレイズして点を集めるに限るわ!!」

「ぬう、簡単に避けられてしまった…ところでグレイズとはなんだ？」

「え、知らないの？グレイズっていうのは、相手の弾幕をかすりながら避けることをいうのよ。まあ、そんなことしなくても良いけど、したほうが楽しいじゃない！」

「それもそうだな。よし、今度から僕様も心がけてみよう！」

「じゃあ、行くわよ!!禁忌「レーヴァテイン」」

フランドールが取り出した棒から炎の剣が生まれ、僕様に襲い掛かってきた。

「ほらほら、当たっちゃおうよ。」

「ふはははは！妖獣である僕様にそのような攻撃が当たるわく」ほら〜！」「危ねえ〜！」

危なかった…

まさか剣から弾幕まで出るとは…

「やるね〜！！楽しくなってきた〜！」

よかった、終わったようだ…これで使用カードは2・2だな。

よし、次だ！

「聖なる光を受けるがいい！天空「ホーリー」」

「ふふふ、誰を狙っているの？禁忌「フォーオブアカインド」」

うおっ！フランドールが4人に増えよった！くっ、全員動き回ることから当てにくい上に本体がどこか解らない！

どちらも時間切れか…

ええい、このままでは埒が明かん！

「この力に耐えられるか！！混沌「メルトン」」

「まだまだ一緒に遊びましょ。禁忌「カゴメカゴメ」」

僕様の大質量の溶岩の塊が、フランドールによる僕様を囲む形で展開された弾幕に当たり、削られていく。

「あなたの弾幕って力押しばかりね。もっと違うのは無いの？」

「ふっ、余裕をおっと、見せ付けてくれるなあ！」

僕様が必死になって避けているのにフランドールはとても余裕そうだ…

それにしてもフランドールよ！力押しの何が悪い！！弾幕はパワーだっ！！

数打ちやいいのは通常弾幕だけでいい！！

せつかくの必殺技スベルカードなのだ！パワーで押した方がかっこいいだろうが！！

よし、乗り切った！

「次はこれ！禁忌「恋の迷路」」

「お前の要望にこたえてやるよ！清水「青き水の牙ダイタルウェイブ」

「きゃあ、津波！！！」

「ぬおおおお、当たってたまるかあ!!」

お互いの弾幕は何故か打ち消しあわず、2人とも回避に専念することになってしまった…

「はあはあはあ、や、やっぱり僕様にはこいつは似合わんな…(なかなか便利だったから今後も使うが…)」

「はあく、危なかった。もうちょっとで当たるところだった!じゃあ行くよ!!禁弾「スターボウブレイク」」

「やつぱ僕様にはパワー系が似合うな。この動きを見切れるか!神突「破壊の閃光グングニル」」

「あら、お姉様のおんなじ名前ね!」

余裕を持っているのも今のうちだ!

「すごい!私の弾幕を打ち払ってくるなんて!」

「おら、喰らえ!!」

「でもまだまだ遊ば?」

こんなにもたやすく避けられるとはっ!!

こいつは後で改良しよう…

「まだまだいけるよね！禁弾「カタディオプトリック」」

「当然だ！喰らえ！！星火」竜の息吹「テラフレア」」

ふふん、避けにくそうな弾幕だが僕様のパワーの前には無意味だ！

「あははは！おもしろい、面白いよ！！」

ぬう、何故当たらんのだろうか…

「じゃあ次はこれね！禁弾「過去を刻む時計」」

「こいつも吹き飛ばしてやろう！命塔「アルテマ」」

危ねえ！何だこのレーザー！くるくると回るんじゃねえ！！

「消しとベレーザー！！」

「あゝあ、後二枚しかないわ。でもこれで終わりかな。楽しかった
」
「よ」

「ふん、まだまだここからが勝負だろう。」

「ふふふ、そうね。じゃあこれを耐えてみて。秘弾「そして誰もい

なくなるのか？」

「な、耐久スペルだと!!！」

僕様が次に出そうと思っていたのと同じタイプの物ではないか!!

聖域「プライド」を使えば何とかかなりそうだがそれだと負けた感じがある。

ここは気合避けだ!!

「はっ、ほっ、よっ、うおっと、まだまだ」

っ、疲れる。まだか、まだ終わらんのか!!

「わ、ほんとに避けきっちゃった!!すごいね!!」

「っ、次はお前の番だ。くらえ! 改変「空の檻」」

「あなたも耐久スペル持ってたんだあ。よし、頑張つて攻略するからね!!」

フランドールめ、笑顔で突貫して行きおつた…

おお、避けとる、避けとる。

なかなかやるな。

む、そろそろ終わりか。

「あゝ楽しかった。でもこれで最後なんだね。」

「そうだな、こいつで最後だ。最後だしな、とっておきのものを見せてやるう。」

「ほんと！？よし、じゃあいくよー！！QED」495年の波紋」

「ここに終わるはこの決闘！通告」アウトオブエデン樂園世界にさよならを」

フランの弾幕は今までも一番避けにくそうだった。

何故そんな他人事なのかというただ、僕様の弾幕でフレンドール
のものを完全に消し飛ばしたからだ。

消し飛ばしたからには当然僕様の元へ届くものは無い。

そして僕様の放った弾幕を見てフレンドールは負けを認めた。

「すごかった。とっっても楽しかったよ！またしようね？」

「うん、またしよう。」

13 おゆづぎかい(後書き)

戦闘シーン

へたくそで解りづらいと思いますが頑張ってみました。
これからも精進していきたいと思います。

14 出来ること、出来ないこと（前書き）

ポイズン「大地に染み渡る、復讐の赤い血よ その使命を果たせ…
ポイズン！

トード「カゝエゝルゝのゝきゝもゝちゝ！ トード！

デス「命に飢えた死神達よ、汝らにその者の身を委ねん… デス！

14 出来ること、出来ないこと

フランとの弾幕ごっこはなかなか楽しいものだった。

やはり実力者を相手取るのは楽しいものだ。

ちなみに、弾幕ごっこが終わった後、彼女にフランと呼べと言われたのでそうすることにする。フランには僕様のことをルーと呼べと言っておいた。

さて、レミリアたちに紅霧のことについて聞きに行くんだが…

「フランよ。」

「どづしたのル〜?」

「僕様の頭の上にはのらないでくれないか。歩きにくいんだが…」

「え〜、だめ?」

「のるなら肩にしてくれ…」

「は〜い!」

フランをのせたまま館に入った僕は咲夜に案内されるままにレミアの部屋に向かっている。

「妹様、ルーウェインといつの間にそんなに仲良く？」

「いい咲夜、良い戦いを繰り広げた者同士は親友になるのよ！パチユリーのところの本にそう書いてあったわ！！」

「そうですか、良かったですね。」

「うん！」

フランと友達というのは構わないがこの状態は何とかしたい…

何故、耳を掴むのか…

たまに力が抜けそうになる…

「お嬢様、連れてきました。」

「よし、入れ。」

「失礼いたします。」

「ルーウェイン、なかなか見事な戦いっぷりだったって何でフランがそんなところに！」

「お姉様、ルーの耳ってふわふわしてて気持ち良いんだよ。」

「え！じゃあ後で私も触りたい！！じゃなくて、どうして肩車されてるの！（私だってしてもらいたいけど誰にもそんな事言えなくて我慢してるのに！）」

「ルーもいって言うてくれたよ！お姉様も後でしてもらえばいいじゃない！」

「レミイ、いつまでも待たせないでちょうだい。」

「あ、わわわ、忘れなさい！今までの全部！！！」

あ、時間が止まった…

「お嬢様ったらあいかかわらず可愛らしい！」

咲夜が暴走し始めた！

少し距離をとらねば！

「ぬおっ！う、動けん！」

何故動けんのだ！咲夜的能力はしっかりと遮断して影響を受けていないはず…

「ねえ、ルーウェイもそう思うでしょ！」

はっ！もしかやフランがくっついてるからか！！確か時間が止ま

つていと動物に干渉できないと咲夜は言っていた！今、僕様が動く肩に乗っているフランの座標がずれてしまう！だから能力を遮断して思考は問題なく行えても体が動かせないのか！！

「そ、そうだな。」

現状を咲夜に知られんようにせねばっ！！

「本当にお嬢様つたらe t c e t c …」

「そろそろ、堪能は終わって話を続けましょうか。」

「そうね、忘れてあげるから。話を続けましょう。」

「そうだ、忘れろ！」

「はいはい、で紅霧についてよね。」

「そ、そうだ。そのことについて聞きたい。」

「あれは私たちが起こした異変よ。」

「そうか、やはり異変かってお前たちがやったのか！？」

「ええ、私たちが起こしたものよ。」

「（パチエに説明を取られた！？でも肝心な理由は私が説明するわ
！！！！）」

「そうだったのか…」

「あれは「ああ、理由はいい。誰が起こしたのか興味があったただだ。」うー」

む、何故起したのかは興味が無いからそういつたらレミリアの奴落ち込みおつた…

「ねえ、あなたの魔法陣のことなんだけど少しいいかしら？」

「ん、なんだ？」

「率直に聞くわ。どうやって立体にしたの！？」

「うおっ！お、落ち着けパチュリー。」

「私は冷静よ！さあ早く教えなさい！！魔法を習得して3ヶ月ほどしか経っていないのにどうやってそんなことができるようになったの！！」

「あゝあれはだな」もったいぶってないで早く教えてちょうだい！「僕様の能力でやった！」

「は？あなたの能力で？」

「そつだ。僕様の能力でだ！」

「あなたの能力っていったい何かしら？」

「ん？咲夜から聞いていないのか？僕様の能力は空間を操る程度の能力だ。」

「空間を操る程度の能力…」

「ルーの能力ってすごいね！」

「うむ、そうだろう！しかし幻想郷では僕様のこの能力もそんなにチートと言う程ではないんじゃないかと思うようになってきた。フランの能力は何だ？」

「私の能力はね！ありとあらゆるものを破壊する程度の能力だよ！ええっとねこうきゅっとしてドカーンってするの！」

「やはりフランの能力もすごいではないか！」

「えへへへ」

お、パチュリーが思考をまとめたようだな。

「ねえ、空間を操る程度の能力で立体魔法陣を生み出したってことは…」

「そうだ、普通の魔法陣を膨らませた！」

「そう。（駄目ね、このやり方はルーウェインにしか出来ない者だわ。参考にならない…）ありがとう。」

さて、聞きたいことも無くなったし。ぶらぶらと幻想郷を回ると
しよつかね。

14 出来ること、出来ないこと（後書き）

いつの間にか寝落ちしてた…

睡眠不足は駄目だ。

15 ニブルヘイム(前書き)

プロテス「たゆとう光よ、見えざる鎧となりて 小なき命を守れ…
プロテス！

プロテジャ「大気に散る光よ、その力解き放ち 堅牢なる鎧となれ
！ プロテジャ！

シエル「沈黙の光よ、音の波動のもたらす邪悪な影から守りたまえ
！ シエル！

シエルジャ「揺らぎ無き光よ、魔力の咆哮から我らを守りたまえ！
シエルジャ！

ウォール「大地に眠る古の光、眠れるその力を地上にもたらせ！
ウォール！

15 ニブルヘイム

今、僕様はようやく紅魔館を出たところだ。

出るときにフランやレミア、咲夜と少しトラブルがあったが、
疲れたので語るのは控えさせてもらおう…

これからどこへ行こうか…

そういえば紫が、友達が冥界にいたか言っていたな…

よし！行ってみるか！

なにやら結界で隔てられていると言っていたが僕様にそんなもの
通用せんしな！

ちなみに何故通用しないのかというと、僕様の余剰能力によるオ
ートガードが結界が僕様を拒むのをはじくからだ。これにより結界
に何のダメージを与えることなく素通りできるのだ。

更に補足として、僕様の空間操作の能力によってか僕様は結界な
どもともとめっぽう強い。ただし、僕様の知覚を凌駕する高度な

結界は気づくことが出来ずオートガードによってそのまま素通りしてしまい、博霊結界を越えたときのように急な変化に戸惑うことになるのだ。

まあ、そんな高度な結界は外の世界では早々お目にかかれんかったのだがここではどうなのだろうか…

ん？ 僕は誰に説明をしているのだ？ まあいいか、能力の確認だ。そして、能力の確認が終わったところで、僕は今、結界の前に立っている。

もちろんそのまま前進だ。

ん？ 屋敷が見えてきたな。なにやら人影もあるようだ。

「こんにちは、こちら白玉楼で庭師を務めております魂魄妖夢と申します。こちらへは生者が何用で？」

刀を二本持ったなにやらおいしそうなものが周囲にふよふよとしている少女だ。

「僕様の名前はルーウェイン・レアンナーナだ。ここへは西行寺幽々子とやらに会いに来た。」

「幽々子様ですか…」

「そうだ。」

「わかりました。とにかく、切れば判る!!やあっ!」

「おわあ!な、何をする!?!いきなり切りかかってくんない!」

「(リアクションは大きいようですが動きが完全に見切られていた!?) まだまだあ!」

「ちょ、やめ、やめろ、止めんか!」

何故急に襲い掛かってくるのだ!?!切れば判るとは何事だ!?!

とりあえず空間裂きでこいつと離れたん距離をとろう!

「ちょっとは会話しやがれ!」

「む、面妖な!」

ふう、これで落ち着いて話せる...っておい、どうしてお前がここに
いる!

15 ニブルヘイム（後書き）

短かつ！！

ここはこれでとめておいたんだ！

あえてとめたんだ！

けっして挫折したんじゃないからな！

そこんとこ勘違いしちゃ駄目だぞ！

ごめんなさい

16 あいつなら仕方ない(前書き)

リジエネ「森羅万象の生命を宿すものたち 命分かち、共に在らん
！ リジエネ！

エスナ「天駆ける風、力の根源へと我を導き そを与えたまえ！
エスナ！

ミュート「鏡なす心に問いて魔の流れを鎮めん… ミュート！

デスペジャ「風に潜む古の力秘めたる精霊達よ 魔に汚れし空を払
え！ デスペジャ！

リタンジャ「星となりし偉大なる神々よ 我が力となりたまえ…
リタンジャ！

16 あいつなら仕方ない

さて、状況の整理をしようか。

まず最初に僕様が冥界を訪れた。

すると魂魄妖夢が出てきた。

魂魄妖夢が切れれば判るとか言って襲ってきた。

空間を切り裂いて魂魄妖夢と距離をとった。

あいつをみつけた。

……………どうしても最後がわからん。

何故ここにいるのだ？

いや、いてもおかしくはないか…

しかし、何故僕様が気まぐれに訪れたタイミングに居合わせるのだ？

もしや普段からそこにいるとか…

いやそれはさすがに無いか。

まああいつだからな。仕方ないのだろう…

僕様が驚き、考え、思考を放棄していたのを見て魂魄妖夢、めんどくさいからこれからは妖夢でいいや、は不審に思ったらしく、僕様が視線を向けた方に目をやってこちらも驚いていた。

「ど、どうしてこんなところに！？幽々子と共にいたはずでは！？」

「無駄だろう魂魄妖夢よ。あいつはそういう奴だからな。なあ、紫？」

「ふふふ、ひどい言われようだね。私は唯お友達に会いに来ただけなのに。」

そう、今まで引つ張ってきた、奴の正体だが八雲紫である…

これほど判りやすい正体当てるは早々無いのもう答えてもなんら問題ないであろう…

「妖夢、実はその彼と私はお友達なのよ。彼に白玉楼に住む西行寺幽々子について軽く教えたのは私なのよ。幽々子の友達になってもらおうとだってね。」

「やっぱりそういう魂胆だったのか…」

「あら、気づいていたのかしら。」

「今、紫を見かけて気づいたんだよ…」

「それは良かった。サプライズで出てきた甲斐が有ったわ。」

「そんなことよりも良いのか？こいつかたまつとるぞ。」

妖夢が紫の姿を見てからちつとも動いてないのだが…

「大丈夫でしょ。早くあがりなさいな。私は先に行って待ってるわ。」

紫の奴行きおった…

とりあえず妖夢を覚醒させるか…

「おゝい、大丈夫か？」

「はっ！私はいったい何を！？紫様は！？」

「落ち着け、紫なら先に行くとか言っ行って行きおった。」

「そ、そうですか…」

「僕様たちも行くのか？」

「は、はい。あの、先ほどは申し訳ありませんでした！紫様の御友人だったとは露知らず！とんだ無礼を「ああ、もういい。そのことは忘れる。」しかし！」

とんだ真面目ちゃんだな…

僕様がいいと言っているのに。

「ならばこれからは妖夢と呼ぶということで手打ちだ。いちいち魂魄妖夢と呼ぶのは面倒だ」

「は、はい。（面倒って…）」

「あと、切れば判るといふ判断方法を止める。」

「それは出来ない相談です。」

「そこを最も変えるべきだと思うのだがな…もういいか、僕様に被害が今後あるわけではないだろうしな…」

「こればかりは譲れません。祖父から受け継いだ考え方なので。」

「絶対に間違えとると僕様は思うがな。ああ、僕様を呼ぶときはルーウエインで良いぞ。」

僕様たちは互いに話をしながら白玉楼へと進み始めていた。

16 あいつなら仕方ない(後書き)

これほど分かりやすいフラグ？はなかっただろう。

いや、フラグですらないな…

普段のパートではこのぐらいの文字数が限界だ…

17 やらないか(前書き)

ヘイスト「ひるがえりて来たれ、幾重にもその身を刻め… ヘイスト!

ヘイスジャ「時の流れよ、我が身を包み込み 巨大な渦をなせ…
ヘイスジャ!

スロウ「時よ、足を休め、選ばれし者にのみ恩恵を与えよ! スロウ!

スロウジャ「天空の意志に従い、真実の時を刻み 天命とならん!
スロウジャ!

ストップ「時を知る精霊よ、因果司る神の手から 我を隠したまえ
… ストップ!

17 やらないか

僕は妖夢と自己紹介などを含めた会話をしながら、この主人である西行寺幽々子のいる部屋まで歩いていった。

「妖夢、ここか？」

「はい、こちらに幽々子様と紫様が居られます。」

とりあえず声をかけてから入るとするか。

「入るぞ〜。」

「はい、どうぞ〜。」

「では失礼する。」

部屋に入ると紫ともう一人の美人な女がおった。

状況と妖夢の様子を見るかぎりこいつが西行寺幽々子なんだろう。

「初めまして、私が西行寺幽々子よ。気安く幽々子って呼んでちょうだい。」

「僕様の名はルーウエイン・レアンナーナだ。ルーとでも呼んでくれ。」

その後、妖夢はお茶の用意やお茶菓子の用意などで場を退出し、僕様たちは3人で話をしていた。

途中、紫の目的？の僕様と幽々子が友達になるというイベントがあったのだが：紫の名誉のために口を噤んでおいてやる。唯一つ言えるとすれば、幽々子はのりがよく、紫をいじるのは楽しいと言ったことだな。これからもよろしく頼むぞ幽々子。

「ほら紫、いつまでも拗ねてないで：妖夢が反応に困るじゃない。」

「二人がかりでさんざんいじっておいてよく言えるわね……」

「何のことかしら。ねえ、ルー？」

「さあ、わからんなあ？」

「この二人……」

紫がため息と共に拗ねた状態から復帰した。

それとほぼ同時にさっきまで晩飯の用意をしていた妖夢が部屋に戻ってきた。

こいつ、妖夢の気配を感じて体面を取り繕っておった！

「あら妖夢、晩御飯の支度は出来たのね。」

「はい、今夜は鍋を用意しました。」

「そう、もうじき春になるしこれで鍋とはしばらくお別れかしら。」

「そうなりますね、ではテーブルの用意も済みましたのでこちらにお持ちいたします。」

僕様もご馳走になるのだ少し手伝ってやるとするか。

「妖夢、僕様も手伝うぞ。」

「ありがとうございます。では、こちらを運んでいただけますか？」

「わかった。しかし、全て運んでしまっても構わんのだろう。」

「え？」

僕様は能力を使って鍋と具、全てをを幽々子の部屋へ移動させた。

「ええ！？」

「ふふん、僕様の能力だ！今ので全て運んでやったぞ。」

「あ、空間を操る程度の能力でしたね。こんなことも出来るなんて…」

「まあな。では部屋に戻ろうか。」

僕様たちが部屋に戻るとすでに紫と幽々子が具を鍋に投入していた。

「はやく座りなさい、そろそろ野菜が煮えるわよ。」

む、それはいかん。いくら肉食な僕様でも野菜だって食べるのだぞ。

「では、いただきます。」

「ふう、食った食った。うまかったぞ妖夢。食べる前は僕様でも多すぎると思っていたほどの具も、食べ始めるとすぐに無くなってしまうな。」

うむ、幽々子があれほど食うとは思わなかった…

「ふふ、では私は片付けをしますね。」

「ねえルー、あそこに枯れ木があるでしょう。」

「ん？ああ、あれか。（なにやら封印されているようだが…）」

「あれは西行妖といってね、ずっと枯れたままなの。」

まあ、封印されているからな。

「最近知っただけだあの樹には何者かが封印されているらしいわ。」

ふん、危険人物か何かか？

「封印を解くには、あの樹に花を咲かせれば良いらしいの。」

「封印されているのだろうか？解いても良いのか？」

「私はあの樹に花が咲くのを見てみたいし、封印されている人物にあつてみたいとも思っているわ。」

「しかしあの樹は枯れ木だろう。咲かせる方法はわかっているのか？」

「顕世から春度を集めれば良いと思うの。」

「そうか、しかしそれを僕様に話すということは…」

「ええ、手伝って欲しいの。」

「なるほど、少し考えさせてくれ。それで集中のために結界を張りたいのだ。」

「ええ、色好い返事を期待しているわ。」

さて、結界を張ってと…

「で？何だ、紫？さつきから僕様にちよっかいをかけてきおって…」

「ごめんなさいね。幽々子には知られたくないのよ。」

「西行妖のことが。」

「ええ、あの樹に封印されている人物なのだけど…」

「お前は知っているのだな。」

「ええ、あの樹には幽々子の肉体が封印されているわ。」

「ほう、生前の亡骸か…」

「幽々子とは彼女が生きている頃からの友達よ。簡単に事情を話すとね、西行妖は咲くたびに人を死に誘う妖怪桜なの。」

そして彼女は当時、死霊を操る程度の能力を持っていたわ。そしてそれらの影響でいつの間にか死を操る程度を持つようになった…

それを嘆き悲しんだ彼女は自害したの。

でも、その能力がある限り転生しても同じ苦しみを味わい続けるだろうと考た結果、幽々子の体を鍵として桜の木に封印を施したわ。これにより西行妖が咲いて人を殺す事は無くなり、幽々子が転生する事も無くなったの。

亡霊となった幽々子は生前の記憶を全て捨て、もう能力のことで悩む事無くここで暮らしているわ。

つまり、幽々子が復活させようとした何者かは幽々子自身なの。

もし西行妖を満開にしたら、封印が解けて幽々子の死体が解き放たれ、幽々子を亡霊のまままでいさせている力も失われ、結果的に幽々子自身が消滅してしまうわ。」

「なるほど、それで？僕様にどうして欲しいんだ？」

「そのへんはあなたに任せるわ。」

「ふむ、たぶんこれは異変とみなされるだろうな…異変の解決人にも会ってみたいしな…うん、僕様は幽々子に協力してやろうと思う。そして最後に解決できなかった場合、裏切ればいいだろう。僕様も幽々子が消えるのは嫌だしな。」

「そう、わかったわ。」

では、結界を解除してと…

「あら、返事は決まったかしら？」

「ああ、協力しよう。僕様は異変解決人と会ってみたい。」

「よかったわ。紫は残念だけど忙しくて協力できないと断られたから…」

「ごめんなさいね。」

「それで、いつから行動を始めるのだ？」

「それは妖夢を遣わせてお知らせするわ。」

「わかった。それまではまたブラブラと幻想郷を回っておこう。」

お、妖夢が戻ってきた。

「ん？どうしたのだ？何か僕様に用事か？」

「はい、もしよければ手合わせ願いたいのですが…」

「いいだろう、やってやる。」

17 やらないか(後書き)

活動報告、たまに変なこと書いてるけど読んでくれる人はい
るのだろうか…

18 剣戟（前書き）

ドムムブ「命ささえる大地よ、我を庇護したまえ 止めおけ！
ドムムブ！

レビテト「慈悲に満ちた大地よ、つなぎとめる手を緩めたまえ…
レビテト！

リフレク「静寂に消えた無尽の言葉の骸達 闇を返す光となれ！
リフレク！

クイック「心震え、失われた時間の輝石を螺旋の相に還さん！
クイック！

妖夢からの挑戦をのりで受けたわけなのだが…

近接戦闘をするべきなのだろうか…

するべきなんだろうなあ…

まあいいか。

とりあえず魔力を集めて剣を生み出してと…ああでもこのままでは実体が無い魔力の塊だな。

そうだ！地面から…

「どうしたのですか？地面に手を付いて…」

まあ見ておけ。僕様の能力にかかればこんなことだって出来るんだぞ、と。

「む、地面から…」

ほらよっと！地面という空間を操ってできた土の剣だ！

このままでは脆いからさっき集めた魔力と妖力で強化して…

よし、完成！これでそう簡単には折れんだろう。

剣技は継承技能で得たものを使えばいいかな。

「準備は出来たぞ。始めようか妖夢。」

「わざわざ合わせて頂き、ありがとうございます。」

「気にするな。僕様もちょうど剣の相手を探していたのだ。」

「そうですか。では、参ります。はあっ！！」

「ふん！速いな、それに芯もしっかりした重い剣だ。しかし、まだまだあ！」

「いきます！幽鬼剣「妖童餓鬼の断食」」

「これしきで倒せると思うなよ！攻撃とはこういつものだ！碎落」
咬撃氷狼破」

「きゃあ！」

ふむ、剛剣はなかなか使い心地が良いな。

「そら、次だ！無限「冥界恐叫打」」

「はい！獄神剣「業風神閃斬」」

「ほう、なかなか…」

「いきますよ！修羅剣「現世妄執」」

「不幸「星天爆撃打」」

妖夢の実力も大体わかってきたことだし、とりあえず剛剣はこんなものだな…

次は聖剣技だ。

「ほらほら、まだまだいくぞ！鬼神「乱命割殺打」」

「それはこちらの台詞です！いきます。人神剣「俗諦常住」」

「続けていきます！天神剣「三魂七魄」」

「無駄だあ！死兆「北斗骨砕打」」

なかなかの腕前だな…

「こいつで終わりだ。天願「聖光爆裂破」」

「お願いします！六道剣「一念無量劫」」

「おらあああつ！」「はあああつ！！」

なかなかいい試合だった。

「妖夢よ、楽しかったなあ。」

「はい、またお願いします！」

- - Side change - -

「うふふ、妖夢ったら楽しそうね。」

「そうね、ルーも楽しそうだね。（あれが継承技能かしら…）」

「まあ、見て。決着が終わったらお友達ってやつね。」

「あら、ほんと。技術指南まで始まったわ。」

「いいわね、楽しそうで。」

「そうね。」

- - - - -

お互いの技を見せ合ったりして、屋敷に戻ると幽々子と紫が迎えてくれた。

「楽しそうだったわね。」

「ああ、楽しかったぞ。お前も今度やるか？」

「私はそっちタイプじゃないからいいわ。」

「そうか。」

「ねえ、ルー。今日はどうするつもりかしら？」

「そうだな…妖怪の山には明日向かうから」

「今日は泊まっていきなさいよ。」

「む、ではお言葉に甘えてお願いしようか。」

「はい。妖夢、お願いね。」

「はい。」

18 剣戟（後書き）

短っ!?

久しぶりに書いたらこんな感じに…

いや、もともと短くなる予定だったんだ！ほんとだよ！

19 山があれば登る！それが真理って奴ですよ（前書き）

グラビデ「無念の死を抱き続ける大地よ 黒き呪縛となれ… グラ
ビデ！

グラビガ「魔空の時に生まれた黒き羊よ 現世の光を包め… グラ
ビガ！

グラビジャ「静粛の闇に響く音無き呼び声の 汝の身を捕えん…
グラビジャ！

19 山があれば登る！それが真理って奴ですよ

白玉楼で一晩過ごし、妖夢の作る朝食を食べ、今、僕は白玉楼を出て、妖怪の山へ向かう。

「世話になったな。おいしかったぞ」

「喜んでいただけでよかったです。」

「またきたときも頼むぞ。」

「はい。」

「じゃあ、行ってくる。」

「例の件よろしくね。」

さて、登ろうか！といたいところなのだが…

先ほどから何者かの気配を感じるな。

僕様を監視しているのか？

ここの者たちは排他的だと聞いたしな…

とりあえず隠れている者を捕まえるか。

空間操作の能力を持つ僕は空間把握にも精通している。

つまり、隠れている者など簡単に見つけて、能力で空間ごと拘束できるのだ！

そら、そこだー！！

「うわっー！！」

「声は聞こえど姿は見えず…ん？ここか？ふむ、河童か？」

「な、なんだい。」

「いや、視線が気になったから捕まえただけだ。」

「気になったから捕まえたって…いや、それよりもやくこの金縛りをといてくれよ。」

「ああ、すまん。で？どうして見ていたのだ？まあ、山に入ろうとしたが故の監視だろうが。」

「警告しようとしたんだよ…」

「そのわりに隠れて見ていただけのようだったが…」

「私は人見知りなんだ！だからこの光学迷彩で姿を隠していたのに…」

「人見知り？人見知りが警告など出来るのか？」

「たまには出来るさ！！」

「たまにつて…」

「もういいだろ！こんな風に暴かれたら今更人見知りも無いよ！！」

「あー、すまん。」

「もういいよ…」

このなんともいえない空気、どうしたものか…

「あーもう！とりあえず自己紹介するよ。私の名前は河城にとりだよ。」

「僕はルーウェイン・レアンナーナだ。」

「それでどうして山に入ろうとしているんだい？」

「僕は最近幻想郷に来てな、いろいろな場所を回ろうと思ったのだ。ここにはその一環としてだな。」

「そんな遊びの気持ちでお山に入ろうとするのはお勧めしないね。」

もうちょっと進めば天狗が巡回警備していて、発見次第攻撃される

よ。」

「僕は強いから大丈夫だ！」

「相手したことも無いのにどうしてそこまで自信がもてるのやら…」

「僕様だからな！」

「理由になつてないし…」

そつえばこいつ、光学迷彩がどうとか言っていたな…

「なあ、にとり。お前はどうかやってその光学迷彩を手に入れたのだ？最近まで外にいた僕はそいつが幻想入りするとはどうしても思えないんだが…」

「おお、これかい？いいところに目をつけたね！これは私が作ったのさー！」

「な、なんだと！」

「私たち河童は技術屋でね！他にもいろいろと作ったんだ！」

「おお〜！それは是非見たい！」

「んふふ、見たいかい？見たいのかい？」

「見せてくれるのか！ー！」

「よし！ついといで！私の工房を見せたい！」

僕様の好奇心が刺激されるぜ！！

20 一羽見たら後3000百羽はいると思え(前書き)

スリプジャ「言葉去り偉大なる忘却の手に委ねん 意識無き闇に沈め… スリプジャ！」

ブライジャ「天の与する光に碎ける闇の瞳 己が生命を知れ… ブライジャ！」

コンフジャ「音の間に消ゆ古の法の甦らん 狂気王の言葉を聞け… コンフジャ！」

トードジャ「か〜え〜る〜の〜〜〜 だい がっ しょ〜
！ トードジャ！」

フレアジャ「地這う暗黒の力、天を呪う者たち 煉獄の火を捕えろ… フレアジャ！」

にとりについて行き、工房に着いた僕は彼女の発明品を見せてもらっていた。

「すごいな、ニトリ！僕様が外で見えたものとそっくりな物がいっぱいだー！」

「ふふん、凄いだろー！」

むー？いつの間にか時間がかなり経っている！

「にとりよ、なかなか楽しかったがそろそろ僕は行かねばならん。」

「そうかい、残念だけどここまでか…！」

「また来た時に続きを見せてくれ。」

「ああ、待ってるよ。気をつけて行って来な。」

「ではな。」

なにやらフラグを立てるようなお別れだったが…

おう、何者かがやって来おった。

「何者だ！ここは妖怪の山！我々天狗の縄張りを知っての侵入か！」

「いや知らなかった。」

「ならば早々に立ち去れ！今なら見逃し、断る！というか知ってたし。」

「おまえ、ふざけるなよ！」

おう、真面目そうな奴だったからついおちよくってしまっただけなら斬りかかってきおった。

「待て。」

「ぐ、動けない!？」

にとりにやったのと同じように空間を固定して拘束してやったんだが…

こいつ弱いな…

空間固定は相手が油断しているか、かなりの実力差が無いとそう簡単には出来ないんだが…

少し力を入れてやったからとはいえ、ここまで簡単に拘束できる

とはな…

「こ、こんなことして後で先輩が来た時知らないからな！」

そろそろうるさいな…こいつの言だと先輩とやらが来るらしいし
それまで結界に閉じ込めておくか。

「お前は静かにそこで先輩とやらを待ってる！」

防音にして…ふう、やっと静かになったな。

お、来たな。

「そこで何をやって」「待て。」「

おう、ついやってしまった…

そしてまた捕まえちゃった…

こいつも結界送りだな。

お、来た来た。

「そこで何w」「ストップだ。」「

弱っ！弱すぎるぞ天狗！

「こいつも結界送りだ！」

「そこだ」「ほい、捕獲。」「」

「ここへ」「ゲットだぜ！」「」

・
・
・
・
・

「k」「そろそろ飽きてきたな。」「」

それにしても弱い…いや確かにそれなりの奴もいたんだが面白がって本気で拘束したのが間違いだっただか…

警告を目的にしていたせいで油断をしていたようだしな…

来た奴全員捕まえてしまったわ…

やはり天狗といえど所詮は白狼天狗ということか。

ちなみに僕様が完全に拘束できる相手のレベルは頑張ってる中の下ぐらいまでだ。

それより上はちょっとした枷にしかならん。

特に上級相手に使ったらむしろ能力の制御で相手に隙を与えかね

んから普段は使わん。

そう、相手が雑魚過ぎたのが悪い!!

と開き直っておこっか…

捕まえた奴らをどうしようか考えていると天狗が二羽やってきた。

一羽は今まで道理の白狼天狗でもう一羽は鴉天狗だ。

どつやらお仲間を連れてきたらしい。

「あややや、椀が焦って私を呼ぶ理由ね。」

「文さん、お願いします。」

一周年記念予告？（前書き）

忘れてしまった人も居られるかとは思いますが

一周年記念としてオリジナル異変予告をば・・・

一周年記念予告？

幻想郷が煌いた。

いつもと変わらない日々を送っていた幻想郷に新たな危機が迫る。

幻想郷全体にもわたる広域魔方陣が広がり、
幻想郷のところでどこで結晶石クリスタルが聳え立ち、
木々などはクリスタルに変化する。

そして幾名かの幻想郷における有力者達までもが彫像に変化した。

博麗神社の巫女、博麗霊夢も神社に現れたクリスタル内に記される
挑戦状を受け取り

この異変への解決に乗り出した。

当ても無く解決に向かう彼女の下に幾人かの実力者達が集まる。

東方幻想界裏伝げんそつかいりでん The One To Succeed

Intention .

続・予告

博麗の巫女の下に集まる実力者達

「こんな分かりやすい異変にこの私が立ち向かわないわけには行かないんだぜ」

普通の魔法使い

「どうして貴方が其処にいるのですか」

毘沙門天の弟子

「さとり様が心配してますから早く帰ってきてくださいよお」

熱かい悩む神の火

「ふふ、決着を付けましょうか」

永遠と須臾の罪人

「さあ、帰りましょう。皆心配していますよ」

完全に瀟洒な従者

「いったいどうしてこんなことを」

祀られる風の間人

対するは異変を楽しむ仕立て人

「私のほうがお前より強いって事を白蓮に示してやるのさ」

未確認幻想飛行少女

「お姉ちゃんにはもうちょっとしたら帰るって伝えておいて
閉じた恋の瞳

「そろそろこの因縁を終わらせてやるよ」

蓬萊の人の形

「ねえ、早く遊ぼうよ。大丈夫、いきなり壊したりはしないよ」
悪魔の妹

「身をもって覚えるときな。神つてのは案外気まぐれ物なんだよ」
土着神の頂点

「全身全霊、全てを懸けてかかって来い」
意思を継ぐ者

さあ、祭りが始まる

そして、この異変がもたらすものは・・・

Coming soon!

M
a
y
b
e
⋮

続・予告（後書き）

夢のEXボス連戦！！

EXボスⅡ裏

ということとで題名を更に変更！

東方幻想伝 東方幻想界 東方幻想界裏伝

改定作業がめんどくさいなあと思ってしまった今日この頃
キャラの軸を忘れ、捉えられそうに無い今日この頃
いったい何時になったら終わるのか・・・

っていうか改定するの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302n/>

東方幻想界裏伝

2011年10月7日23時34分発行